

深谷市

伊勢方遺跡

県道花園本庄線関係埋蔵文化財発掘調査報告

2006

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県の北部地域は利根川を境に群馬県と接し、本県の北の玄関口として広域交通の要衝になっています。今年1月には深谷市・岡部町・花園町・川本町の1市3町が合併し、新しい深谷市が誕生しました。

交通の要衝として広域的な交流を促進するためには、体系的な道路網の整備が必要不可欠であるため、埼玉県では高速道路の整備効果を最大限に活用できるように、インターチェンジに短時間でアクセスできる道路の整備を推進しています。

新深谷市域である花園インターチェンジから旧岡部町を通って本庄市へ通ずる主要地方道路花園本庄線の整備もそのひとつです。

関係事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地として伊勢方遺跡があり、その取扱いについて、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、古墳時代から平安時代の集落とそれに伴う遺物が発見されました。調査の事例が比較的少なかった櫛引台地南西部、深谷市本郷地域における貴重な資料となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力をいただきました埼玉県県土整備部道路街路課、熊谷県上整備事務所、旧岡部町教育委員会、深谷市教育委員会並びに地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長

福 田 陽 充

例 言

1. 本書は、埼玉県大里郡岡部町（現深谷市）本郷字伊勢方に所在する伊勢方遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査局に対する指示通知は、以下のとおりである。

伊勢方遺跡（ISGT）

埼玉県大里郡岡部町（現深谷市）大字本郷
字伊勢方1398番地-2他

平成17年6月14日付け 教生文2-21号

3. 発掘調査は県道花園本庄線建設工事に伴う事前調査であり、埼玉県生涯学習部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業の発掘調査については、新屋雅明、松本美佐子が担当し、平成17年6月1日から平成17年7月31日まで実施した。整理報告書作成事業

- は新屋雅明が担当し、平成18年1月4日から平成18年2月28日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は株式会社GIS関東に委託した。
6. 写真是調査時の撮影を発掘担当者が行い、遺物の撮影を大屋道則が行った。
7. 出土品の整理・図版作成は赤熊浩一、大谷徹、瀧瀬芳之、兵ゆり子が行った。
8. 本文の執筆はI-1を埼玉県生涯学習部生涯学習文化財課が、II・III・VとIVの造構を新屋、IVの遺物を赤熊、鉄製品を瀧瀬、埴輪と埴輪出土住居跡の記述を大谷が行った。
9. 本書の編集は新屋が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成18年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
11. 本書の作成にあたり、鳥羽政之氏、深谷市教育委員会（旧岡部町教育委員会）に御教示・御協力を賜った。記して謝意を表します。

凡 例

- 1 本書中におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による平面直角座標第Ⅳ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値（m）を示す。また、各挿図における方位は、全て座標北を示している。
- 2 遺跡におけるグリッドの設置は、前記座標系に基づいて設置し、10m×10mを基本グリッドとしている。
- 3 グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向は西から東へ1、2、3…、南北方向は北から南へA、B、C…と付けている。
- 4 本書の遺構の略号は以下のとおりである。

S J	豎穴住居跡	S K	土坑
S E	井戸	S D	溝
p	ビット		
- 5 本書の挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構 全体図	1:500
住居跡・土坑・井戸・ビット	1:60
溝	1:80
- 6 本書の遺構の略号は、原則として以下のとおりである。

金属製品・土製品	1:2
石器	1:3
銭	1:1
- 7 遺物のうち、須恵器は断面を墨塗りにした。また彩色土器については彩色範囲を網かけで示した。
- 8 土師器・須恵器の観察点は以下のとおりである。
 - ・口径・器高・底径の計測値はcmを単位とする。
 - ・（ ）内の数値は復元推定値、〔 〕内の数値は残存値である。
 - ・胎土は肉眼観察できるものを次のように示した。

雲：雲母	片：片岩	角：角閃石
小礫：小蝶	砂粒：砂粒子	
白粒：白色粒子	赤粒：赤色粒子・鉄分	
 - ・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。
 - ・色調は、農林水産省技術会議事務局監修「新版標準土色帳」を基にし近似する色を示した。
- 9 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図と旧岡部町発行の都市計画図1/2,500を使用した。

目 次

序		
例言		
凡例		
目次		
I 発掘調査の概要	1	
1 調査に至る経緯	1	
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	
3 発掘調査・整理・報告書作成の組織	3	
II 遺跡の立地と環境	4	
III 遺跡の概要	8	
IV 遺構と遺物	12	
(1) 住居跡	12	
(2) 土坑	23	
(3) 井戸	26	
(4) 溝	28	
(5) ピット	28	
(6) その他の遺物	30	
V まとめ	31	

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	7	
第2表 第1号住居跡出土遺物観察表	13	
第3表 第2号住居跡出土遺物観察表	14	
第4表 第3号住居跡出土遺物観察表	16	
第5表 第4号住居跡出土遺物観察表	18	
第6表 第5号住居跡出土遺物観察表	19	
第7表 第6号住居跡出土遺物観察表	20	
第8表 第7号住居跡出土遺物観察表	22	
第9表 土坑出土遺物観察表	28	
第10表 遺構外出土遺物観察表	30	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第16図 第4号住居跡出土遺物	17
第2図 周辺の遺跡	6	第17図 第5号住居跡	19
第3図 調査区位置図	9	第18図 第5号住居跡出土遺物	19
第4図 調査区全体図(1)	10	第19図 第6号住居跡・同遺物出土状況	19
第5図 調査区全体図(2)	11	第20図 第6号住居跡出土遺物	20
第6図 第1号住居跡	12	第21図 第7号住居跡	21
第7図 第1号住居跡遺物出土状況	13	第22図 第7号住居跡カマド・同遺物出土状況	21
第8図 第1号住居跡出土遺物	13	第23図 第7号住居跡出土遺物	22
第9図 第2号住居跡	14	第24図 土坑(1)	24
第10図 第2号住居跡出土遺物	14	第25図 土坑(2)・井戸	27
第11図 第3号住居跡	15	第26図 上坑出土遺物	28
第12図 第3号住居跡遺物出土状況	15	第27図 溝・ピット	29
第13図 第3号住居跡出土遺物	16	第28図 遷構外出土遺物	30
第14図 第4号住居跡	17	第29図 伊勢方遺跡出土遺物	31
第15図 第4号住居跡遺物出土状況	17		

写真図版目次

図版1 A区全景(北から)	第8号溝
B区全景(北から)	第10号溝・第31~35号土坑
図版2 D区全景(北から)	第11号土坑
D区全景(南から)	第2号井戸
図版3 C区全景(北から)	図版11 第1号住居跡出土 土師器甕
E区全景(北から)	第2号住居跡出土 土師器甕
図版4 第1号住居跡	第3号住居跡出土 土師器甕
第1号住居跡遺物出土状況	第4号住居跡出土 須恵器坏
図版5 第2号住居跡(西から)	第4号住居跡出土 須恵器高台付坏
第2号住居跡(南西から)	第5号住居跡出土 須恵器高台付坏
図版6 第4・5号住居跡遺物出土状況	図版12 第5号住居跡出土 上師器甕
第4・5号住居跡	第3号住居跡出土 椭形甕
図版7 第3号住居跡	第6号住居跡出土 吊金具
第6号住居跡	土坑出土遺物
図版8 第7号住居跡	遷構外出土 須恵器坏
第7号住居跡カマド遺物出土状況	遷構外出土 遺物
図版9 第7号住居跡カマド	図版13 第7号住居跡出土 円筒埴輪

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県では、「彩の国5か年計画2.1」に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、從前より関係部署と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

主要地方道花園本庄線は、関越自動車道花園インターチェンジに接続し、県北地域の拠点を結ぶ幹線道路であるが、狭いで屈曲している箇所が多いため、整備工事が進められてきた。

平成6年、県文化財保護課（当時）は、岡部町（現深谷市）本郷地内の道路改良事業予定地における埋蔵文化財範囲確認調査を実施し、古墳時代の遺構・遺物の所在を確認した。

更に、この確認調査及び補足調査等の結果に基づき、「地方主要道花園本庄線（岡部町本郷地内）事業地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて（照会）」（平成12年2月23日付け道建第603号）に対して、平成13年7月16日付け教文第577号により、県道路街路課長あて以下的内容を回答した。

1 埋蔵文化財の所在

- 工事予定地内には岡部町No.36遺跡が所在すること

2 法的手続きをについて

- 当該埋蔵文化財を含む地において土木工事等を実施する場合には、着手に先立ち文化財保護法第57条の3（現第94条）第1項の規定による発掘通知を提出すること

3 取り扱いについて

- 当該埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、やむを得ず工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査の実施すること
- 狭小で発掘調査が実施できない区域については文化財保護課が工事立会を行うこと

道路街路課、熊谷県土整備事務所及び文化財保護課は、現状保存を含む埋蔵文化財の保護措置について協議を行ったが、工事計画の変更が困難であったため、記録保存のための発掘調査を実施することとした。

また、発掘調査は財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することになった。

なお、地元岡部町教育委員会との協議の結果、岡部町No.36遺跡は伊勢方遺跡と呼称することになった。

法第94条第1項の規定による発掘通知は平成17年5月20日付け熊谷県土整備事務所長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長の勧告は、平成17年7月25日付け教文第3-313号で通知した。

また、法第92条第1項の規定による発掘調査の届出は、平成17年5月18日付け財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長の指示は、平成17年6月14日付け教文第2-21号で通知した。

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

伊勢方遺跡の発掘調査は、平成17年5月から7月にかけて行った。調査面積は1187m²である。伊勢方遺跡における発掘調査の実施経過は以下のとおりである。

5月に事務手続きを行い、下旬には事務所の設置、調査区の表土除去に着手した。

工事の影響を受ける箇所は現道に沿った細長い部分である。調査区は本郷駅在所の南方約120mの地点から南西に向かって300mの長さにわたっている。300mの途中には調査区の切れ目があり、便宜的に北側からA区、B区、C区、D区、E区と呼称し調査を開始した。A区・B区は現道の東側、C～E区は現道の西側に沿った調査区である。

表土掘削は北側のA区から開始し、南西の調査区へと進んでいった。また、安全確保のため現道との境には柵工事を行った。6月上旬までにE区までの表土掘削が終了した。

6月上旬に補助員による作業を開始した。また、基準点測量を委託して実施した。

発掘作業は遺構確認から着手し、住居跡、溝、土坑などを確認するとともに、古墳時代から近世に至る各時代の遺物も確認した。

北側のA区から順次、遺構覆上の掘り下げを行い、土層断面図の作成を行った。遺物が出土した住居跡ではその状況を写真・図面に記録し、遺物を取り上げた。完掘した調査区から写真撮影・平面図作成の記録をとり、7月下旬にはこれらの作業をすべて終了した。また、7月にはこうした遺構の地山となっているロームを掘り下げ、旧石器時代の調査を行っ

たが、遺物の検出には至らなかった。

その後、器材の撤出、事務所の撤去、重機による調査区の埋め戻し作業を行い、現場における作業を全て終了した。

また、事務処理等を行って発掘調査に関わる業務をすべて終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成・印刷は、平成18年1月から平成18年3月まで実施した。

遺構には竪穴住居跡、井戸、土坑、溝、ピットなどがある。これらの遺構から出土した遺物の状況図などとともにこれらの第2原図を作成した。また土層説明の入力、全体図の作成、周辺遺跡図・遺跡位置図等の作成を行った。

こうして作成した2次原図をスキャナーでパソコン内に取り込み遺構図のトレースを行った。遺構図にはパソコン内で諸記号・数字・スケール・上層説明等の貼りこみを行い完成させた。

遺物には土師器、須恵器、金属製品などがあり、これらの遺物を復元し、拓本・実測を行ったのち、トレース・版組作業を行った。また、写真撮影を行った。

写真図版は、調査時に撮影した写真を選択し、遺物写真とともにトリミング等を行った。

原稿執筆終了後、原稿・遺構図・遺物図・遺物観察表と写真を割付した。2月下旬に報告書印刷用の原稿等の入稿し、3回の校正を経て、3月下旬に報告書を刊行した。

また、図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（平成17年度）

(1) 発掘調査（平成17年度）

理事長
副理事長
常務理事兼管理部長

福出陽充
飯塚誠一郎
保永清光

(2) 整理・報告書刊行（平成17年度）

理事長
副理事長
常務理事兼管理部長

福田陽充
飯塚誠一郎
保永清光

管理部

管理部副部長
主席
主席
主任
主任
主任
主任

村田健二
高橋義和
宮井英一
長滝美智子
福田昭美
菊池久
海老名健

管理部

管理部副部長
主席
主席
主任
主任
主任
主任

村田健二
高橋義和
宮井英一
福出昭美
菊池久
海老名健
岩上浩子

調査部

調査部長
調査部副部長
主席調査員
(調査第二担当)
統括調査員
調査員

今泉泰之
坂野和信
鍾持和夫
新屋雅明
松本美佐子

調査部

調査部長
調査部副部長
主席調査員
(資料整理第二担当)
統括調査員

今泉泰之
坂野和信
金子直行
新屋雅明

II 遺跡の立地と環境

伊勢方遺跡は深谷市（旧岡部町）大字本郷字伊勢方に所在する。JR高崎線岡部駅の南西約3.6kmの位置にある。

平成18年1月1日に旧深谷市、岡部町、川本町、花園町が合併し、人口14万7千人、面積137.58平方キロメートルの深谷市が誕生した。

深谷市は埼玉県の北西部に位置しており、南部の旧花園町、川本町域には荒川が流れ、北東部は利根川をはさんで、群馬県と隣接している。

今回調査を実施した伊勢方遺跡は深谷市の西端、櫛挽台地上に立地している。

遺跡の周囲は畑と水田が広がる農村地帯で大規模な養鶏も行われている。特に畑作ではトウモロコシとブロッコリーが広く栽培されている。

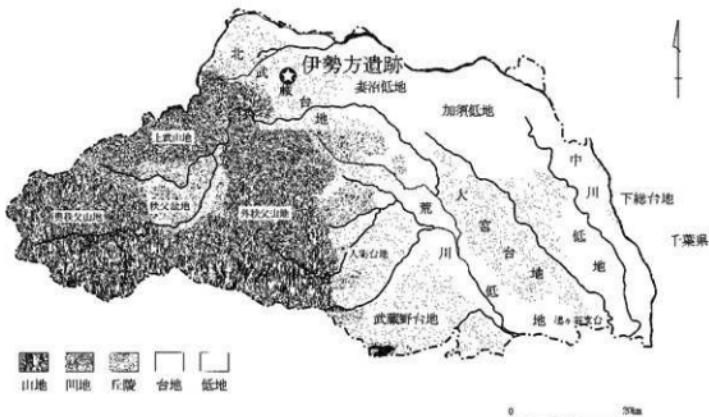
埼玉県の地形は西の山地部分と東の平野部分に大別される。深谷市は松久丘陵、北武藏台地、妻沼低地といった山地から移行する多様な地形に分かれている。

北武藏台地は比企丘陵以北の台地の総称であり、北から河川を境にして本庄台地、櫛挽台地、江南台地などに分かれている。櫛挽台地、江南台地は荒川によってつくられた古い扇状地が浸食されてできた台地であり、荒川扇状地を基盤としているローム台地である。

櫛挽台地は荒川左岸の台地である。荒川右岸の江南台地より規模が大きく、寄居から用土・深谷・岡部方面に延びている。

台地はさらに高位の櫛面と低位の寄居面に分かれる。櫛面は櫛挽台地の主体をなしており、武藏野面に対比されている。遺跡は櫛挽台地、櫛面の西端部に位置している。

櫛挽台地の形は正三角形に近く、北西側は藤治川、北東側は妻沼低地に面した崖線、南側は荒川に沿った崖線で区切られている。標高は扇頂部の寄居で100メートル、北東部の妻沼低地との崖線で50メートルを示す。



第1図 埼玉県の地形図

伊勢方遺跡の標高は71.9~73.2mであり、調査区南部から北部に向かって緩やかに傾斜している。

遺跡の西側には藤治川が北流し、対岸には松久丘陵を望む。松久丘陵は美里町から岡部町へと連なる小丘陵で、東方の山崎山（117m）諏訪山（110m）は一連の丘陵が開析された残丘状の丘陵である。また、藤治川は山崎山東側崖部と櫛挽台地の間を蛇行し、桜沢で志度川に合流する。さらに西田付近で小山川に合流し利根川にそそいでいる。

第2図に伊勢方遺跡（1）周辺の遺跡を示した。本庄台地や櫛挽台地北部での調査事例が多い。以下、調査が行われた遺跡を中心に概観していく。

2~11は本庄台地の遺跡である。河川を境に櫛挽台地に面した櫛沢地域の中でも、志度川の左岸台地上に立地する遺跡群である。縄文時代、古墳時代～平安時代の遺跡が多い。

岡部西部工業団地の開発に伴う調査が行われている。沖田I~III遺跡（2~4）では縄文時代前期、古墳時代、平安時代の集落が調査されている。宮西遺跡（5）からも縄文時代前期の住居跡18軒、古墳時代から平安時代に至る300軒以上の住居跡が確認されている。東光寺裏遺跡（7）、地神低遺跡（10）においても古墳時代から平安時代の集落跡が調査されている。東光寺裏遺跡では縄文時代前期の住居跡や2基の古墳も見つかっている。古墳は後期の伊勢塚古墳（8）が知られている。また、中世の遺跡には川辺館跡（6）、桜沢六郎成清館跡（9）の館跡がある。

櫛挽台地の遺跡のうち、旧岡部町の北東部に位置する地域は律令期になると大集落の形成が始まる。

倉庫群が検出され、古代櫛沢郡の正倉跡として注目を浴びた中宿遺跡の南方に広がる熊野遺跡（13）は現在までに数百軒の住居跡と多数の掘立柱建物跡、大溝跡、道路跡などの多彩な遺構が調査されており、7世紀後半から10世紀初頭頃まで集落が継続したことが明らかになっている。白山遺跡（14）は奈良・平安時代の住居跡80軒以上の他、大規模な掘立柱建

物跡6棟と中世館跡などが調査され、新田遺跡（15）でも奈良・平安時代の住居跡20軒が調査されている。熊野遺跡の周辺にはこうした律令期を中心とした遺跡が集中しており、岡遺跡群と総称されている。

大集落が営まれるようになった律令期より以前の岡遺跡群周辺は古墳群がつくられる地域であったと考えられている。お手長山古墳（12）は埴輪をもたない終末期の前方後円墳で6世紀末から7世紀初頭の築造と考えられている。白山古墳群（14）は6世紀初頭に築造が始まる群集墳である。群集墳のうち蛇喰古墳が現存しているが、他の古墳の墳丘は失われている。二次調査では帆立貝式前方後円墳跡1基、円墳跡24基が調査されている。前原1号墳（16）は古墳時代後期の円墳、愛宕山古墳（17）は方墳である。

23~36は松久丘陵の残丘である山崎山、諏訪山周辺に立地する遺跡であり、旧岡部町西部から美里町に至る地域である。

古墳群のほか平安時代の住居跡が調査されている千光寺遺跡（23）、古墳時代の祭祀遺跡として知られる貉山祭祀遺跡（29）、中世の今泉館跡（31）が知られている。

古墳は数多く認められる。西山古墳群（25）は前方後円墳を中心に13基の円墳が存在する。川輪型天塚古墳（26）は埴輪壺を出土した古式古墳として知られる。諏訪山古墳群（27）は帆立貝式前方後円墳跡を含んだ円墳群で構成される。貉山古墳群（30）では6基の円墳が確認されている。大明神1号墳（32）は径約32m、大明神2号墳（33）は径約12mの円墳である。さらにその西には安光寺古墳群、諏訪山古墳群が分布している。

松久丘陵の南側には寄居市域の遺跡が分布する。用土平遺跡（37）は弥生時代中期の初期農村集落として著名である。中山遺跡（38）は弥生時代後期の集落と平安時代の鉄生産遺跡である。三次にわたる調査が行われており弥生時代後期・奈良時代・平安時代の住居跡や製鉄炉などが検出された。



第2図 周辺の道路

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	文献
1	伊勢方遺跡	集落跡	縄文 古墳 奈良 平安	
2	沖田上古跡	集落跡	縄文 古墳 平安	木戸1998
3	沖田Ⅱ遺跡	集落跡	縄文 平安	木戸1998
4	沖田Ⅲ遺跡	集落跡	縄文 古墳 平安	木戸1998
5	宮西遺跡	集落跡	山墳 奈良 平安	木戸2005
6	川辺遺跡	城郭跡	羅立 南北朝 宝町	埼玉県教育委員会1988
7	東光寺墓遺跡	集落跡	縄文 古墳 奈良 平安	中島他1980
8	伊勢坂古墳	古墳	山墳	
9	櫻武六郷城清瀬跡	城郭跡	羅立 南北朝 宝町	
10	地神低遺跡	集落跡	古墳 奈良 平安	佐藤 斎藤1978
11	南遺跡	集落跡	古墳 奈良 平安	
12	お子長山古墳	古墳	古墳	
13	樋野遺跡	集落跡	古墳 奈良 平安 宝町	島羽1997 赤 楠2000 富田2002
14	白山遺跡 白山古墳群	集落跡 古墳群 城郭跡 宮内跡	古墳 奈良 平安 南北朝 宝町	中村1989
15	新田遺跡	集落跡	奈良 平安 宝町	赤熊2000
16	前原1号墳	古墳	古墳	
17	愛宕山古墳	古墳	古墳	
18	中南遺跡	集落跡 古墳	古墳 奈良	
19	下道南遺跡	集落跡	縄文 古墳 奈良	
20	地都古跡	集落跡	奈良 平安 飯食 南北朝 宝町	
21	西郷ヶ谷遺跡	集落跡 城郭跡	縄文 古墳 奈良—南北朝	佐藤1983 埼玉県教育委員会1988
22	山河御天神跡	寺院跡	飯食 南北朝 宝町	
23	千光寺遺跡	集落跡	古墳 奈良 平安	増田1975
24	千光寺古墳群	古墳群	古墳	増田1975
25	西山古墳群	古墳群	古墳	
26	川崎宿天保古墳	古墳	古墳	
27	諏訪山古墳群	古墳群	古墳	
28	石原山丘古跡	溝路	古墳	
29	龜山祭祀跡	祭祀	古墳	
30	慈山古墳群	古墳	古墳	
31	今泉遺跡	城郭跡	鍛冶 南北朝 宝町	
32	大明神1号墳	古墳	古墳	
33	大明神2号墳	古墳	古墳	
34	西河原遺跡	集落跡	縄文 古墳	
35	古山宝跡	窑跡	古墳 飯食	
36	赤城市遺跡	集落跡	古墳	
37	川上千遺跡	集落跡	学生 古墳	
38	中山遺跡	集落跡 製鉄跡	奈良 平安 江戸	小林1999 赤熊2005
39	茶臼山1号墳	古墳	古墳	
40	茶臼山2号墳	古墳	古墳	
41	茶臼山遺跡	集落跡	縄文 古墳	
42	水久保遺跡	集落跡	縄文 古墳	小林 安岡1979
43	西谷遺跡	集落跡	縄文 古墳	栗原 小林1979
44	樺原遺跡	集落跡	古墳 奈良 平安	
45	上杉館跡	城郭跡	宝町 稲田	埼玉県教育委員会1988
46	東谷遺跡	集落跡	縄文	
47	北東京原遺跡	集落跡	縄文	
48	加敷赤堀跡	集落跡	古墳	
49	針ヶ谷館跡	城郭跡	羅立 南北朝 宝町	
50	新井解跡	城郭跡	南北朝 宝町	
51	中村遺跡	集落跡	古墳 奈良 平安	
52	木原陣屋跡	城郭跡	稲田 江戸	
53	百間堀館跡	城郭跡	羅立 南北朝 宝町	

伊勢方遺跡は旧岡部町の中でも南部一帯を占める本郷地域に位置している。本郷地域にも多くの遺跡(39~53)が分布するが、比較的調査事例が少ない。縄文時代の草創期の遺跡として著名な水久保遺跡(42)・西谷遺跡(43)がある。

藤治川右岸には茶臼山古墳群が知られていたが、現在確認される古墳は2基(39・40)である。また、中世の遺跡として、上杉館跡(45)、針ヶ谷館跡(49)、新井館跡(50)、本郷陣屋跡(52)、百間堀館跡(53)が知られている。

III 遺跡の概要

伊勢方遺跡は、櫛挽台地の西の縁に立地している。遺跡の西側は櫛挽台地の縁を北に流れる藤治川の低地を見下ろし、その対岸には山崎山の丘陵地形が望できる。櫛挽台地は荒川扇状地を基盤とするローム台地であり、遺跡から北東の方向に向かって扇状地の緩い傾斜が認められる。

この櫛挽台地は寄居面と櫛挽面に分けられている。寄居面は櫛挽面の南側を浸食した荒川の河岸段丘であり、立川面に対比されている。

当遺跡の立地する櫛挽面は寄居面より高い面で、櫛挽台地の主体をなしており、武藏野面に対比されている。第5図左下には遺構の地山となっていたロームの層序を示した。立川ロームに対比される層序が確認されている。

今回調査を行った部分は遺跡の中央付近から南南西の方向へ約300メートルにわたる範囲であり、県道花園本庄線に沿った幅の狭い調査区となっている。調査面積は1187m²である。

調査区には切れ目があり、便宜上北からA・B・C・D・E区と呼称し調査を実施した。また、調査区全体に北から南へA B C・・・、西から東へ1 2 3・・・と10メートルのグリッドを設置し、調査を行った。

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡7軒、井戸2基、溝10条、土坑33基、ピット7基であった。住居跡は、古墳時代後期2軒（第1・2号住居跡）、奈良時代1軒（第6号住居跡）、平安時代4軒（第3～5・7号住居跡）であった。

井戸のうち第1号井戸は平安時代、第2号井戸は時期不明であった。土坑、溝跡、ピットについては中近世のものと考えられる。

調査区は後世の擾乱が絶じて顕著であった。遺構の調査終了後、地山のロームが残存していた箇所を選び、旧石器時代の調査を行った。A区（E-13・14、F-13グリッド）、B区（K-12、L-12グリ

ッド）、C区（R-8、S-7グリッド）に各2箇所2m×2mの調査区を設定したが、旧石器時代の遺物の検出には至らなかった（第4・5図）。

A区は北部でごく緩く北に向かって傾斜するが、ほぼ平坦に72.2メートル前後の標高で推移している。A区からは古墳時代後期の第1号住居跡と奈良時代の第6号住居跡が見つかっている。住居跡の一部が調査区にかかる限定的な調査であった。他に井戸2基、土坑8基、溝6条、ピット7基を調査した。

B区は長さ26mのやや短い調査区で、標高は72.3メートル前後であった。古墳時代の第2号住居跡が見つかっている。住居跡の北西隅とカマドの一部を調査した。

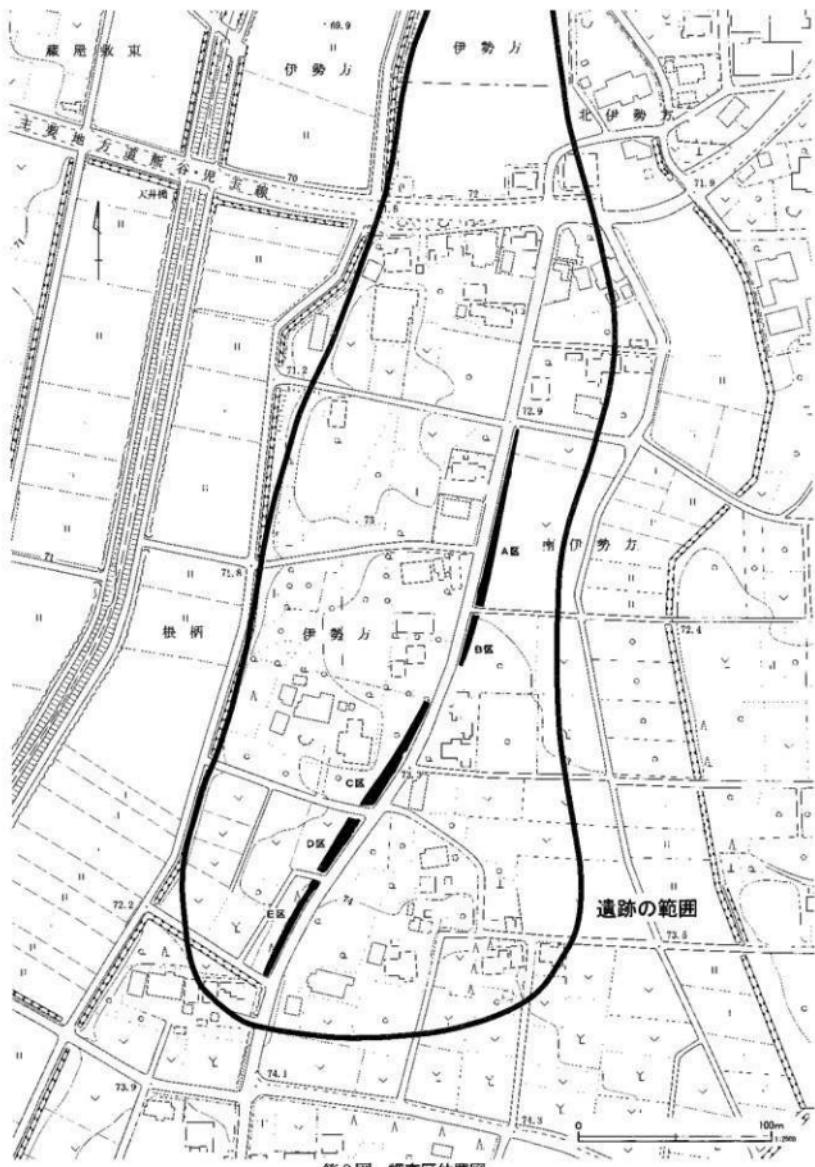
C区は後世の擾乱が顕著で深く、遺構の遺存状況は良くなかった。近世の土坑5基と溝2条が見つかっている。ロームが遺存する部分での標高は北側で72.6m、南側で73mを測り、全体に北側に向かってごく緩く傾斜している。

D区は耕作による擾乱が顕著だったが、遺構が最も集中している調査区であった。平安時代の第3～5号住居跡が確認された。土坑20基、溝2条を調査した。ローム面の標高は73.2mであった。

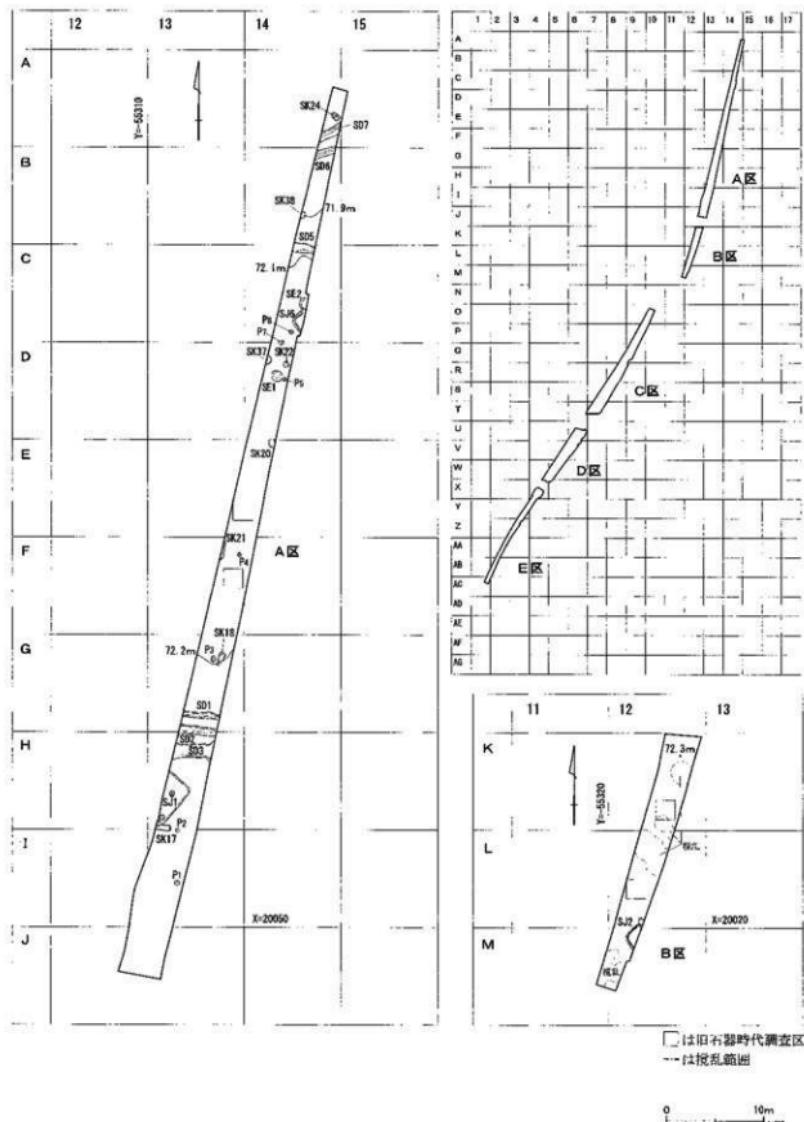
E区では北端から平安時代の第7号住居跡が見つかっている。住居跡のカマドからは円筒埴輪が出土している。E区でロームが確認されたのはこの第7号住居跡周辺のみであり、第7号住居跡の南側から調査区南端まで擾乱されていた。擾乱を掘り下げ、遺構の残存を確認してみたが、擾乱は深く遺構は残っていないかった。E区の北端でのローム面の標高は73.2mであり、周辺の地形から判断して北に向かって緩やかに標高が低くなる地形と考えられる。

遺構外からは縄文時代、古墳時代、平安時代、中近世の遺物が散見された。

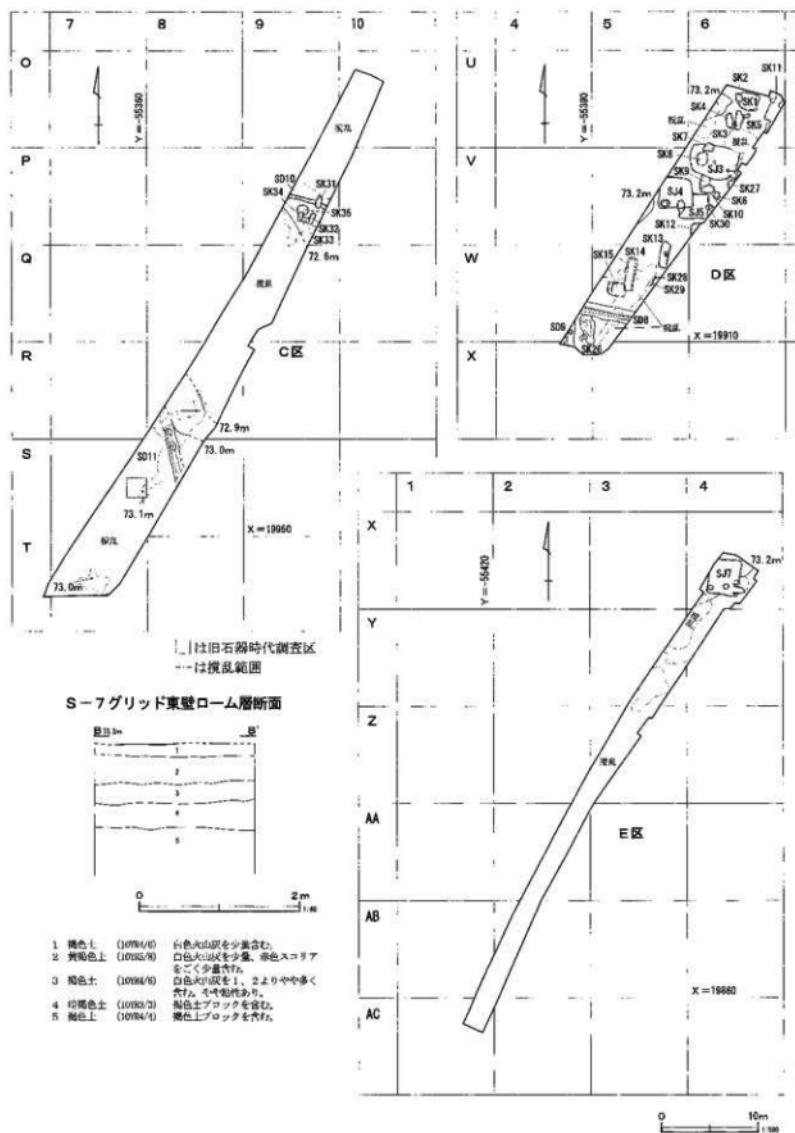
今回の調査で出土した遺物の総数はコンテナ6箱であった。



第3図 調査区位置図



第4図 調査区全体図 (1)



第5図 調査区全体図 (2)

IV 遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第6図・第7図）

第1号住居跡はA区南部のH-13グリッドに位置し、住居の南東側の壁、東隅部と南隅部を確認している。住居の北西側は調査区外となっている。平面形は方形であり、住居の規模は南東壁が4.7m、深さ0.4mである。

覆土はローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土を基調とし、自然堆積の状況が確認された。耕作による擾乱が床面にまで及んでいた。

床面は堅く締まった状態であった。ピットは2本確認されている。P1は柱穴とするにはやや位置が寄っている。P2は南隅近くに位置している。貯蔵穴と思われる。径0.7m、床面からの深さ0.3mである。カマド、周溝は確認されなかった。土師器の蓋

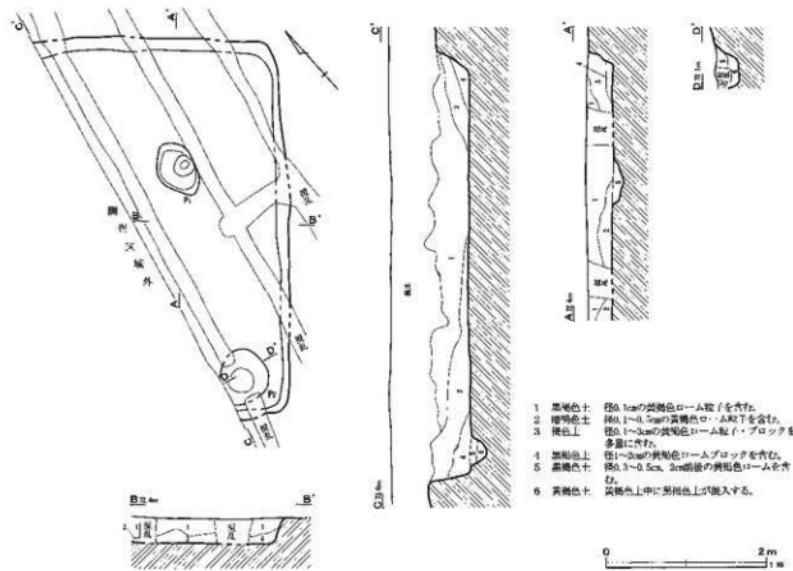
3点が壁面に沿った部分の床面直上から出土した。

第1号住居跡出土遺物（第8図）

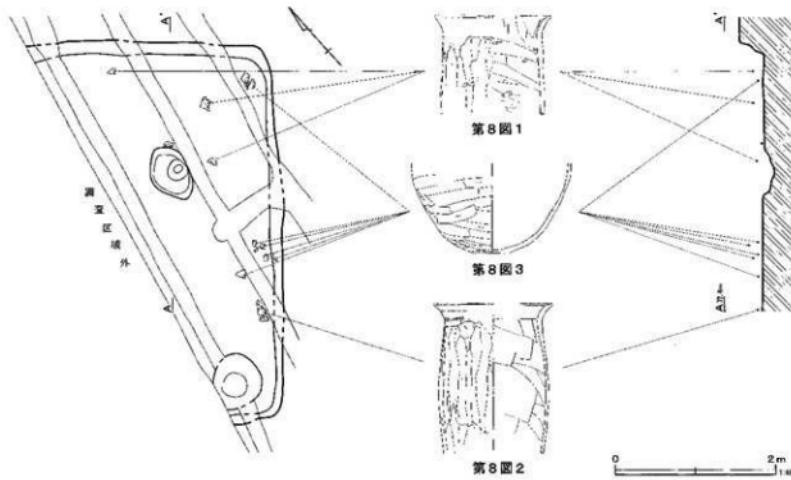
第8図1は土師器長胴甌である。口縁部は外傾にわずかに開いて立ち上がる。胴部は円筒状に伸び、上半部のみ残存する。口縁部横ナデ、胴部は外面縱方向の箇ケズリ、内面斜め方向の箇ナデを施す。

第8図2は土師器長胴甌である。口縁部は外傾に開いて立ち上がる。胴部は円筒状に伸び下端でやや径を小さくする。口縁部横ナデ、胴部は外面縱方向の箇ケズリ、内面斜め方向の箇ナデを施している。

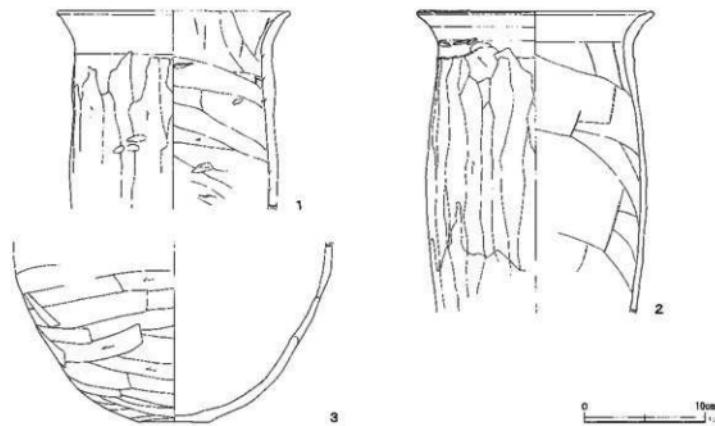
第8図3は土師器丸甌である。底部から胴下半部の残存である。平底の底部から胴部が大きく外傾に膨らんで立ち上がる。胴部外面は横方向の箇ケズリ、内面はナデを施すが斑点状剥離が著しい。



第6図 第1号住居跡



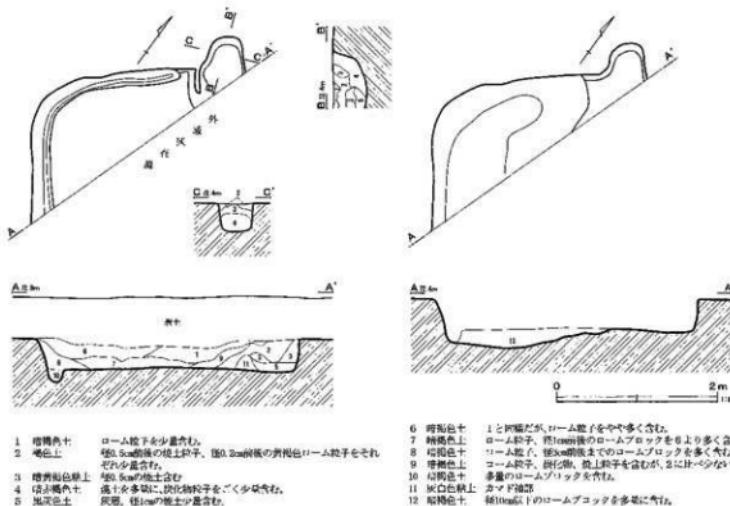
第7図 第1号住居跡遺物出土状況



第8図 第1号住居跡出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

査定番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	上飾壺	壺	(18.8)	[16.3]	—	1/4	赤粒 白粒 小砾	良好	にぶい黄橙	
2	上飾壺	壺	(19.5)	[24.8]	—	1/4	角砂粒 赤粒 小砾	普通	にぶい橙	
3	土師器	壺	—	[15.0]	5.8	1/2	黄砂粒	普通	にぶい橙	



第9図 第2号住居跡

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

検査番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土師器	壺	(10.9)	[2.6]	—	1/5	雲母白胎	普通	にぶい黄橙	

第2号住居跡（第9図）

第2号住居跡はB区南部のL-12・M-12グリッドに位置している。住居跡のごく一部の調査であった。住居の西隅部と北西壁に設けられたカマドを確認した。全形は方形、主軸方位はN-30°-Eと考えられる。

住居跡にはローム粒子を含む暗褐色土の覆土が堆積していた。カマドの右袖は調査区域外となっており、左袖と煙道部が確認された。左袖は灰白色の粘土層で構築されている。天井部は暗黃褐色の粘土が崩壊した状況が確認され、煙道部には暗黃褐色粘土の下層で焼上からなる暗赤褐色土が顯著であった。

周溝が確認されている。周溝は明瞭に確認ができ、床面からの深さ0.15m程度であった。

第9図右には掘り方の状況を示した。カマド部付近を除いて掘り方が設けられ、ロームブロックを多

- 1. 暗褐色土
 - 2. 灰白色土
 - 3. 暗褐色土
 - 4. 灰白色土
 - 5. 暗褐色土
 - 6. 灰白色土
 - 7. 暗褐色土
 - 8. 灰白色土
 - 9. 暗褐色土
 - 10. 灰白色土
 - 11. 灰白色土
 - 12. 灰白色土
- 1と同様だが、ローム粒子を多く含む。
ローム粒子、既10cm後のロームブロックをより多く含む。
ローム粒子、既10cm底までのロームブロックを多く含む。
ローム粒子、既に物、焼上跡を含むが、2に比べない。
多量のロームブロックを含む。
カマド跡
既10cm以上のロームブロックを多量に含む。



第10図 第2号住居跡出土遺物

量に含む暗褐色土で貼床している。

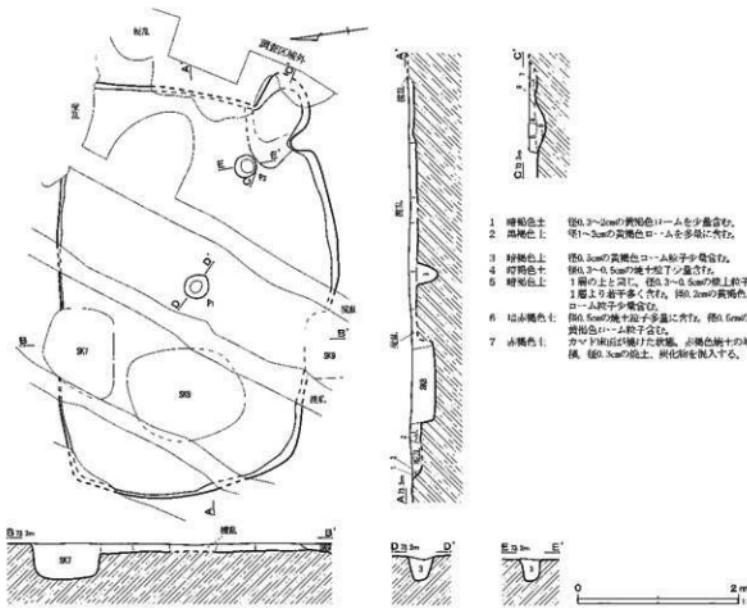
出土遺物は非常に少なく上師器壺が1点覆土中から出土した。

第2号住居跡出土遺物（第10図）

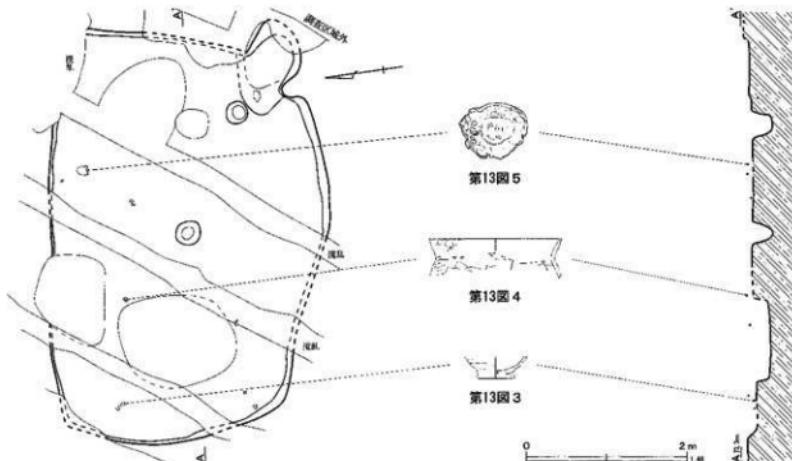
第10図1は上師器模倣壺である。口径が小さく、口縁部が上方に短く立ち上がり、体部は半球状で丸底である。口縁部と体部の境には弱い稜をもつ横微壺である。口縁部ヨコナデ、体部窓ケズリを施す。

第3号住居跡（第11図・第12図）

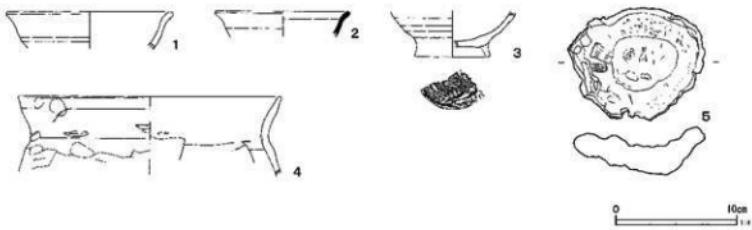
第3号住居跡はD区北部のV-6グリッドに位置している。



第11図 第3号住居跡



第12図 第3号住居跡遺物出土状況



第13図 第3号住居跡出土遺物

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表

査定番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	环	(13.3)	[3.1]	—	破片	雲白胎	不良	褐色	木野産 酸化焰焼成
2	須恵器	环	(11.0)	[2.1]	—	破片	白粒	普通	灰	木野産
3	須恵器	高台付环	—	[3.0]	—	破片	雲白胎	不良	褐色	木野産 酸化焰焼成
4	土師器	甕	(21.4)	[6.6]	—	破片	角赤胎 白粒	良好	にぶい黄褐	—
5	鉢津	椭形鍛冶津	長13.892	厚2.4	—	—	—	—	—	—

D区の第3～5号住居跡付近は今回の調査区の中でも標高が高く、表土が比較的薄かったため、耕作による攪乱も顕著であった。加えて近世の土坑の集中、住居の掘りこみが浅かったことなどが重なり、遺構の遺存状況は不良であった。

第3号住居跡の平面形は不整長方形であった。長軸方向は長さ約5.2mで、N-77°-Wを指している。短軸方向の長さは3.5m、深さ0.1mである。

カマドは南東隅付近に設けられていた。覆土は焼上粒子を多く含んでいたが、袖部などの構造は検出し得なかった。壁外に燃焼部が張り出しているのが確認されたが、カマドのある南東隅から北東隅にかけて、大きく攪乱されており、燃焼部の形状等は明確に把握できなかった。

住居跡は近世の第7～9号土坑や耕作によって壊されており、壁の残存部分は少なかった。床面はやや軟弱で、周溝・貯藏穴は確認されていない。径0.3m、深度0.3mのピットが2本確認された。

出土遺物として、平安時代の須恵器環・土師器甕・椭形鍛冶津が出土している。いずれも床面直上からのお出土であった。

第3号住居跡出土遺物（第13図）

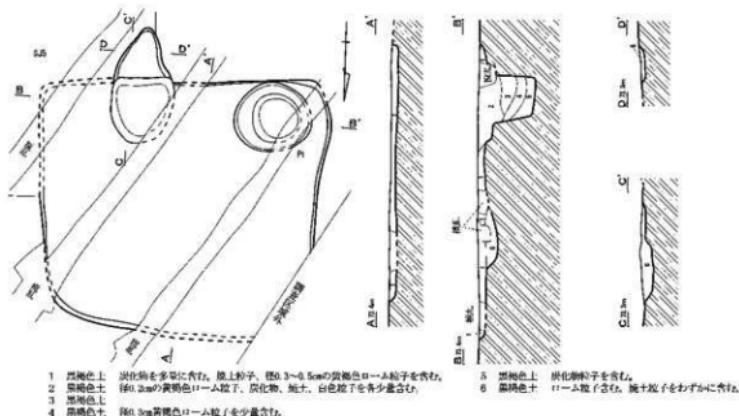
第13図1・2は須恵器環である。1は酸化焰焼成により褐色で、器壁もやや厚い。2は還元焰焼成され灰色に焼きてしまっている。ロクロ整形で、口縁部は外方に開き、口唇部肥厚する。3は須恵器高台付环である。底部糸切り後、高台部を貼り付けるが欠損している。酸化焰焼成で褐色である。

第13図4は土師器甕で「コ」の字状口縁甕より後出の甕である。口縁部ヨコナデ、胴部外面は横窓ケズリ、内面窓ナデを施している。

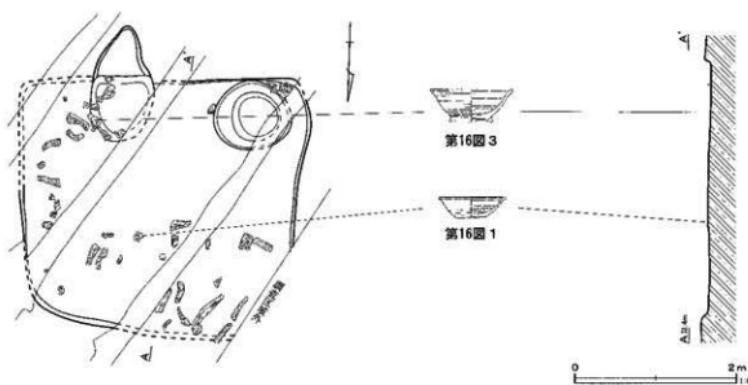
第13図5はやや大型の椭形鍛冶津である。平面形態は橢円形で中心部が大きく窪む。裏面は舟底状に湾曲し一方に大きくこぶ状に突出している。表面は円形の細かな窪みや木炭痕が空洞状に残る。

第4号住居跡（第14図・第15図）

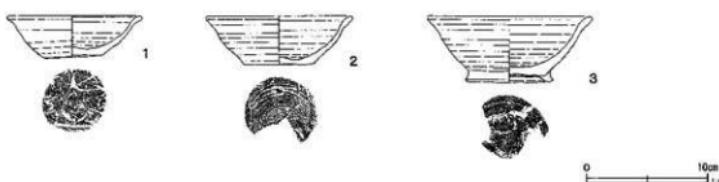
第4号住居跡はD区中央付近のV-5グリッドに位置し、北西端が調査区外となっているが、ほぼ全形が確認された。平面形は正方形である。カマドはほぼ真南に向かっており、住居の規模はカマドのある南北の主軸方向で3.4m、東西の輪で3.2mである。耕作の影響を受けており、床面の深度も確認面から



第14図 第4号住居跡



第15図 第4号住居跡遺物出土状況



第16図 第4号住居跡出土遺物

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

鉢器番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎上	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	环	(10.8)	3.5	4.8	2/3	角砂粒白粒	普通	にぶい黄	
2	須恵器	环	(11.7)	4.0	5.8	2/3	片砂粒白粒	普通	にぶい黄橙	
3	須恵器	高台付环	(13.3)	5.4	(7.2)	1/4	角砂粒白粒	普通	にぶい赤褐	

0.1mと浅かった。覆土は炭化物を多く含んでおり、第15図に示した輪郭のはっきりした炭化材以外にも炭化ブロックを多く含む覆土が分布していた。そのため、遺構平面は耕作による遺存状況の不良にもかかわらず比較的明瞭に確認でき、第5号住居跡を壊していることが観察された。

床面は比較的軟かった。周溝、ピットは確認できなかった。埋土は炭化材、炭化物粒子を含む黒褐色土を基調としていた。

カマドは南壁のやや東隅寄りに設けられていた。壁外に燃焼部が張り出した構造で、確認長1.4m、燃焼部幅約0.7mを測る。燃焼部は壁外に0.65mほど張り出し、壁外に向かって緩やかに立ち上がる。袖部は残存していないかった。

貯蔵穴は南西隅部寄りに位置する。形態は楕円形で、2段に掘りこまれている。規模は長径95cm、短径84cmを測る。2段目の掘りこみは径60cm、床面からの深さ60cmである。覆土はローム粒子、炭化物粒子を含む黒褐色土であった。

炭化材は床直上から出土したものである。第16図1は床直上から、3は炭化材の下の床面から出土している。

第4号住居跡出土遺物（第16図）

第16図1・2は須恵器環である。いずれも酸化焰焼成され色調は褐色で内面には黒斑が見られる。調整はロクロ整形で底部糸切り離し。形態は平底で体部が外傾に湾曲しながら立ち上がり、口縁部が外方に開き口唇部やや肥厚する。3は須恵器高台付环である。調整はロクロ整形で体部外面のロクロ目は明瞭である。底部は糸切り後、「ハ」の字状に開く高台部を貼り付ける。酸化焰焼成で黒斑が見られる。いずれも重ね焼きによる焼成と考えられる。

第5号住居跡（第17図）

第5号住居跡はD区中央付近のV-5・6グリッドに位置している。平面形は長方形で、主軸はほぼ真東を指している。長軸は推定で3.1m、短軸は2.5mである。住居の掘り込みはきわめて浅く6cm程度であった。床面は比較的軟弱で、周溝・柱穴等は確認されなかった。

カマドは東壁中央に設けられているが、第30号土坑によって壊されていた。燃焼部には焼土が顯著であったが、袖部は残存していなかった。南東隅は調査区外となっており、南西隅は擾乱の影響を受けていた。また、北西部分は第4号住居跡に壊されていた。

第5号住居跡出土遺物（第18図）

第18図1は須恵器高台付环である。体部外面のロクロ目が明瞭で底部は糸切り後、「ハ」の字状に開く高台部を貼り付ける。酸化焰焼成で黒斑が見られる。

第18図2は土師器小型甌である。短い口縁部が外側に開き、胴部は球形状にやや張りをもつ。整形は回転台を利用したナデ調整を施している。

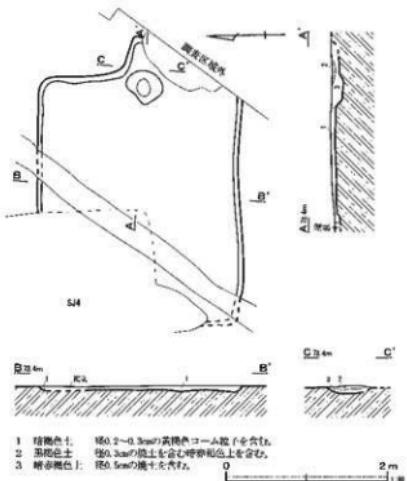
第6号住居跡（第19図）

A区のC-14グリッドに位置している。

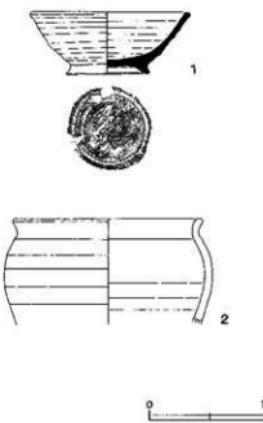
西隅部の部分的な検出である。第2号井戸に切られている。全体の形状や規模は不明である。カマド、柱穴等は確認されなかった。ローム粒子を含む暗褐色土によって埋まっており、確認面から0.37mの深さであった。壁溝が巡っていた。

第6号住居跡出土遺物（第20図）

第20図1は須恵器环である。底部全面回転窓ケズリを施す。平底の底部から体部が内湾気味に立ち上がる。口唇部や外に開く。第20図2は比企型环で



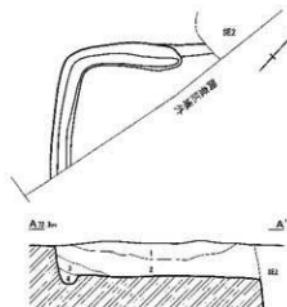
第17図 第5号住居跡



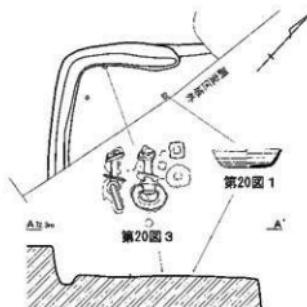
第18図 第5号住居跡出土遺物

第6表 第5号住居跡出土遺物観察表

探査番号	種類	器種	口径	蓋高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	高台付环	12.7	5.2	6.8	3/4	砂粒白粒	普通	に赤い黄緑	
2	土師器	甕	15.4	[8.7]	—	1/2	砂粒黒粒	普通	褐	ロクロ回転による整形

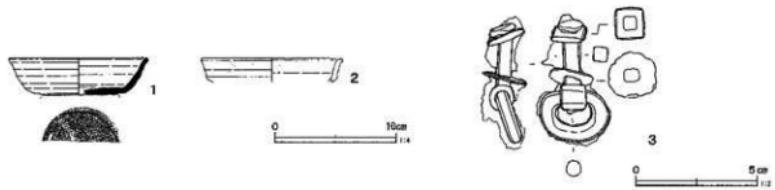


第19図 第6号住居跡・同遺物出土状況



0 10cm
2m

1 黄褐色土 ローム細粒を少く含む。
2 灰褐色土 ローム細粒を多く含む。施土段干を軟質含む。
3 黑色土 ローム細粒を少く含む。
4 布陶土 0.5m前後のロームブロックを多く含む。



第20図 第6号住居跡出土遺物

第7表 第6号住居跡出土遺物観察表

件名番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	环	(11.3)	3.0	(6.4)	1/4	片白粒	普通	灰黄	
2	土師器	环	(11.4)	[1.9]	—	破片	緻密	良好	赤褐	比金型環 赤彩

ある。内面全体にかけて赤彩を施している。口唇部内面は沈線状の窪みが巡る。

第20図3は吊金具である。厚さ約1.5cmの板材に取り付けられた金具と考えられる。鉄製で、座金具の部分は銅で作られている。吊金具の全長は5.0cm、環の部分は径2.8×2.2cm、厚さは0.6cmである。

先端を輪にして環を連結した金具を座金具に通して板材に打ち込み、板材からつきぬけた先端に方形の裏金をあて、先端をつぶして固定したと考えられる。

座金具は花弁状を呈する。2.0cm×2.0cm、厚さ0.1cmである。裏金は方形である。1.2cm×1.2cm、厚さ0.2cmである。

第7号住居跡（第21図・第22図）

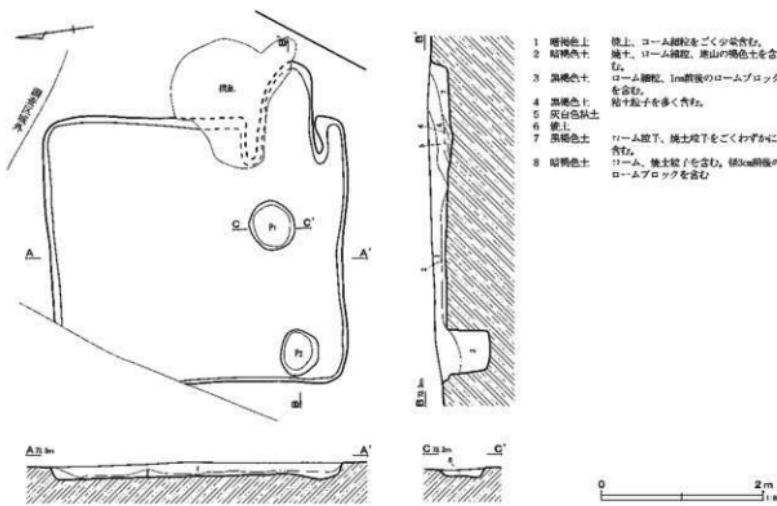
第7号住居跡は、E区北端のX-4グリッドに位置し、北西隅部が調査区外に延びているが、今回の調査で全体の形状と規模を確認できた住居のひとつである。平面形は横長の長方形で、規模は長軸長3.8m、短軸長3.20m、深さ0.2mである。主軸方位はN-95°—Eを指す。

床面は固く綿まとった状態であった。柱穴や壁溝は確認できなかった。埋土はローム細粒を含む暗褐色

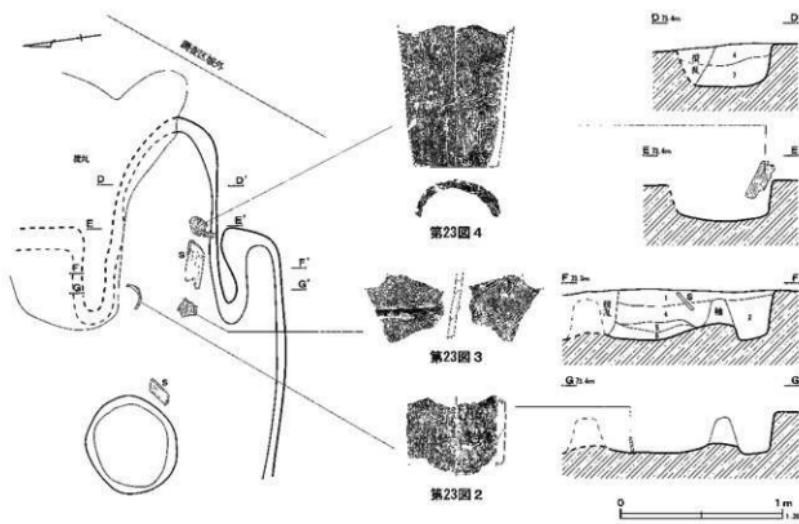
土を基調としていた。

カマドは東壁の南東隅寄りに設けられ、北側が擾乱によって大きく壊されていた。壁外に燃焼部が張り出した構造で、確認長1.27m、燃焼部幅約0.56m、右袖の残存長0.6mを測る。燃焼部は壁外に0.67mほど張り出し、燃焼部使用面は壁外に向かって緩やかに立ち上がる。擾乱によって左袖は壊されていたが、右袖は比較的良好に残る。袖は地山ロームを掘り残し、その上に焼土と炭化物の混じった灰白色粘土を貼って構築されていた。カマド埋土は第5層が白色粘土、第6層が焼土である。おそらく天井部の崩落したものであろう。使用面はあまり赤色化していなかった。

カマドの構造で注目されるのは、袖の補強材として埴輪片と板状の片岩が使用されていた。右袖の付け根部分に、半裁した円筒埴輪の底部（もしくは形象埴輪の器台部）を逆さにして立て（第23図4）、それに接するように長さ30cm、幅10cmほどの板状の片岩が斜めに立てかけられていた。また右袖の先端部付近から第23図3の円筒埴輪の破片が出土している。擾乱により明確でないが、左袖の先端部にあたる部分に第23図4と同じように半裁した円筒埴輪の体部片（もしくは形象埴輪の器台部）が直立した状



第21図 第7号住居跡



第22図 第7号住居跡カマド・同遺物出土状況

態で出土した（第23図2）。出土した埴輪の器面には粘土が付着し、部分的に被熱により脆くなつた部分も見られた。

貯藏穴（P2）は、カマドと対向する南西隅部寄りに位置する。形態は楕円形で、規模は長径57cm、短径40cmを測り、床面からの深さ50cmである。埋土はローム細粒・直径1cmのロームブロックを含む黒褐色土である。

ピット（P1）はカマドの手前に1本検出された。形態は円形で、長径60cm、短径55cm、深さ11cmである。底面は平坦で、柱穴以外の性格と考えられる。
第7号住居跡出土遺物（第23図）

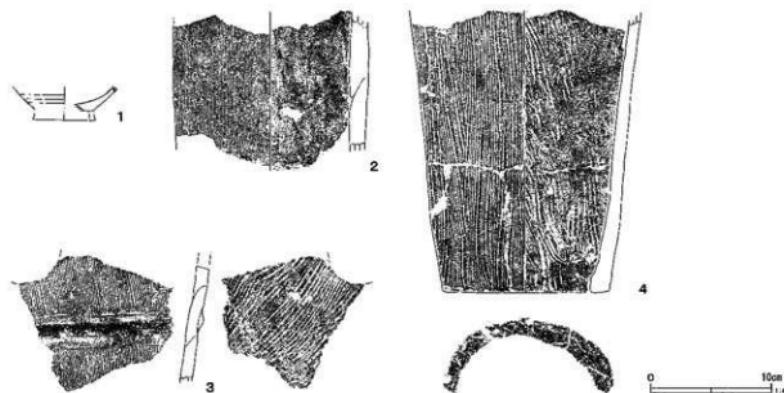
第23図1は須恵器高台付壺である。調整はロクロ整形で底部糸切り後、高台部を貼り付けるが欠損している。酸化焰焼成で茶褐色である。

2は円筒埴輪の体部、もしくは形象埴輪の器台部と考えられる破片である。外面調整はタテハケ、内面調整はタテ指ナデを丁寧に施す。ハケメが2cmあ

たり15本と細かい。胎土は角閃石、白色粒子の混入が目立ち、直径2mmほどの角閃石安山岩粒を含む。焼成は良好であるが、2次焼成により器面が脆くなっている。色調は明赤褐（5YR5/6）である。

3は円筒埴輪の体部の破片である。断面三角形の突帯を貼付し、円形透孔の一部を残す。突帯はヨコナデ幅3cm、高さ0.3cmを測る。透孔はやや小さめの円形を呈し、右回り穿孔である。外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケを施す。1と同じく内外面に使用しているハケメ工具が異なる。外面は2cmあたり13本の細かいハケメ、内面は7本とやや粗いハケメである。胎土は角閃石、白色粒子の混入が目立ち、直径2mmほどの角閃石安山岩粒を少量含む。焼成は良好で、硬質に焼き上がる。色調は明赤褐（5YR5/4）である。透孔脇の破断面が磨耗しており、2次利用の際の使用痕と考えられる。

4は円筒埴輪の底部、もしくは形象埴輪の器台部と考えられる破片である。底径13.6cmに復元され、



第23図 第7号住居跡出土遺物

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表

拓図番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	高台付壺	-	[2.8]	-	破片	白粒	不良	橙褐	酸化焰焼成

残存高23.1cmを測る。外面調整はタテハケ、内面調整は下端までタテないしナナメハケを施す。特徴的な点として内外面に使用しているハケメ工具が異なることである。外面は2cmあたり10本のやや細かいハケメ、内面は7本とやや粗いハケメである。底面は平坦で、葉状の植物繊維の圧痕が付着する。基部は幅5cmほどの粘土帶で形作り、粘土紐を巻き上げて成形する。胎上は角閃石、白色粒子の混入が目立ち、直径2mmほどの角閃石安山岩粒を少量含む。焼成は良好であり、硬質に焼き上がる。色調は橙(7.5YR7/6)である。

出土した埴輪の特徴は、2・4が同一個体ではないが、内外面に別のハケ工具が使い分けた特徴を共有する最下段の長く伸びた円筒埴輪、もしくは形象埴輪の器台部と考えられるものである。3の円筒埴輪は突帯が断面三角形を呈し、6世紀後半代の特徴を示している。また、3点とも胎土に軽石(角閃石安山岩粒子)を混入している。

(2) 土坑

33基の土坑が見つかっている。第1号から第38号まであり、16・19・23・25・36は欠番である。このうち第11号土坑、第26号土坑からは中世、第32号土坑からは近世の遺物が出土しており(第26図)、当該期の土坑と考えられる。それ以外の土坑については総じて出土遺物が少量であった。上師器の小片等が散見されるものもあるが、明確に古代と考えられるものはない。33基の土坑は中近世に属するものとして報告する。

第1号土坑(第24図)

D区U-6グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径2.1m、短径1.8m、深さ0.25mである。第2号土坑に壊されている。陶器の小片が出土している。

第2号土坑(第24図)

D区U-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長径1m、短径0.74m、深さ0.2mである。主軸方向はN-7°-Wである。第1号土坑を壊し

ている。第1号土坑と深度がほぼ同じであったため、下端のラインは確認していない。

第3号土坑(第24図)

D区U-6グリッドに位置する。平面形は不整形の長方形である。長径2.1m、短径0.88m、深さ0.23mである。主軸方向はN-2°-Eである。第5号土坑と切り合っているが、攪乱により新旧関係は不明である。瓦小片が出土している。

第4号土坑(第24図)

D区U-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長径1.55m、短径0.7m、深さ0.22mである。主軸方向はN-10°-Wである。

第5号土坑(第24図)

D区U-6グリッドに位置する。長径0.82m、短径0.38m、深さ0.3mである。主軸方向はN-81°-Eである。攪乱により全形は不明である。

第6号土坑(第24図)

D区V-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長径0.84m、短径0.63m、深さ0.32mである。主軸方向はN-2°-Eである。

第7号土坑(第24図)

D区U-V-6グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径1.24m、短径0.8m、深さ0.35mである。

第8号土坑(第24図)

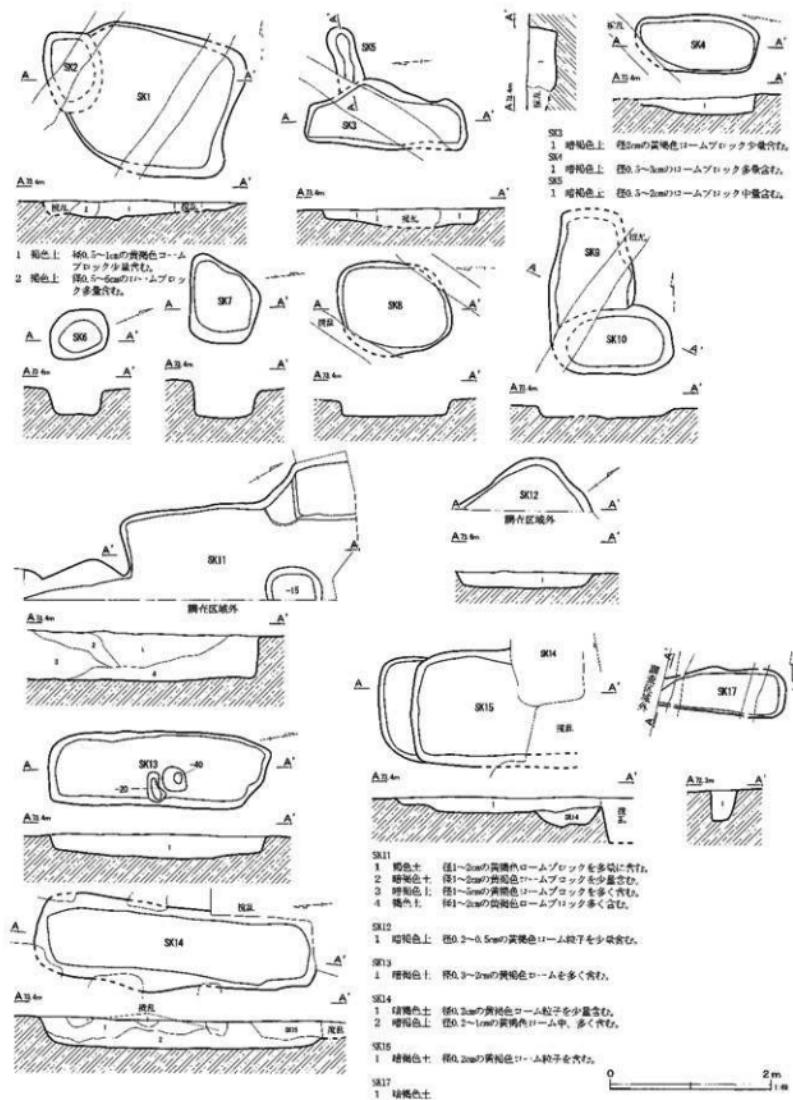
D区V-6グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径1.52m、短径1.24m、深さ0.2mである。主軸方向はN-4°-Wである。

第9号土坑(第24図)

D区V-6グリッドに位置する。北端は第3号住居跡を壊していたが、プランは不明瞭であった。短径1.05m、深さ0.13mである。主軸方向は真北である。第10号土坑と切り合っているが攪乱により、新旧は確認できなかった。

第10号土坑(第24図)

D区V-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長径1.5m、短径0.88m、深さ0.13mである。



第24図 土坑 (1)

主軸方向はN—87°—Eである。

第11号土坑（第24図）

D区U—6グリッドに位置する。平面形は不整形である。調査区外にかかるため、全形は不明である。深さ0.58mで、床面は平坦で堅く締まっていた。

北端部において、階段状に2段の小テラスが設けられていた。確認面から床面の間に10~20cm程度の段差を作っていた。床面には径0.7m、深度0.15mのピットが検出されたが、これも調査区外へとかかっていた。中世のかわらけ、内耳鏡（第26図1・2）の破片が出土している。

第12号土坑（第24図）

D区V—6グリッドに位置する。調査区外にかかりおり、平面形は不明であるが構部が認められる。深さ0.2mである。

第13号土坑（第24図）

D区V・W—5グリッドに位置する。平面形は長方形である。長径2.77m、短径0.96m、深さ0.3mである。上軸方向はN—9°—Eである。小ピットが底面に認められた。

第14号土坑（第24図）

D区W—5グリッドに位置する。平面形は長方形である。長径3.54m、短径1.16m、深さ0.35mである。主軸方向はN—11°—Eである。陶器の小片が出土している。周辺は耕作による擾乱が著しい。切り合い関係にある第15号土坑より古い。

第15号土坑（第24図）

D区W—5グリッドに位置する。平面形は長方形と思われるが、東側は擾乱で失われている。切り合い関係にある第14号土坑より新しい。西側は2段に掘りこみがあった。深さ0.18mである。主軸方向はN—79°—Wである。磁器の小片が出土している。

第17号土坑（第24図）

A区H—13グリッドに位置する。幅が狭く細長い平面形をしており、西側は調査区外となっている。長径1.6m、短径0.74m、深さ0.37mである。主軸方向はN—88°—Wである。

第18号土坑（第25図）

A区G—13グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径1.93m、短径0.68m、深さ0.12mである。主軸方向はN—18°—Eである。

第20号土坑（第25図）

A区D・E—14グリッドに位置する。平面形は円形である。東側は調査区外となっている。長径0.87m、短径0.7m、深さ0.17mである。

第21号土坑（第25図）

A区F—13グリッドに位置する。平面形は不整形である。西側は調査区外に延びており、全形は不明である。深さ0.14mの浅い土坑である。主軸方向はN—12°—Eである。

第22号土坑（第25図）

A区D—14グリッドに位置する。平面形は円形である。径0.63m、深さ0.7mである。

第24号土坑（第25図）

A区A—14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、2段に掘りこみがある。長径0.95m、短径0.64m、深さ0.33mである。主軸方向はN—49°—Wである。

第26号土坑（第25図）

D区W・X—4・5グリッドに位置する。平面形は不整形である。長径3m、短径1.75m、深さ0.68mである。主軸方向はN—10°—Wである。北側を第8号溝に埋されている。底面等に凹凸がある。中世のかわらけ（第26図3）が出土している。

第27号土坑（第25図）

D区V—6グリッドに位置する。南東側が調査区外にかかり、平面形は不明。深さ0.38mである。

第28号土坑（第25図）

D区W—5グリッドに位置する。北西側が擾乱されていて平面形は不明である。深さ0.1mである。第29号土坑と切り合っているが、新旧関係は確認できなかった。

第29号土坑（第25図）

D区W—5グリッドに位置する。北西側が擾乱さ

れており、平面形は不明である。深さ0.13mである。
第30号土坑（第25図）

D区V—6グリッドに位置する。南東側が調査区外にかかるので、平面形は不明である。深さ0.7mである。第5号住居跡のカマドを壊している。

第31号土坑（第25図）

C区P—9グリッドに位置する。平面形は不整の長方形である。長径1.3m、短径0.63m、深さ0.08mである。主軸方向はN—17°—Eである。第10号溝を壊している。

第32号土坑（第25図）

C区P—9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形である。長径1.23m、短径0.5m、深さ0.08mである。主軸方向はN—20°—Eである。第33号土坑を壊している。近世のすり鉢（第26図4）が出土している。

第33号土坑（第25図）

C区P—9グリッドに位置する。第32・34号土坑に壊されており、平面形は不明であるが、同様な長方形の形態と推測される。深さ0.1mである。主軸方向はN—77°—Wである。

第34号土坑（第25図）

C区P—9グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形である。長径1m、短径0.5m、深さ0.08mである。主軸方向はN—22°—Eである。第33号土坑を壊している。

第35号土坑（第25図）

C区P—9グリッドに位置する。平面形は揺円形である。長径1.2m、短径1m、深さ0.08mである。第34号土坑と切り合っているが、新旧は確認できなかった。

第37号土坑（第25図）

A区D—14グリッドに位置する。西側が調査区外にかかり、平面形は不明である。径1.0m、深さ0.14mである。

第38号土坑（第25図）

A区B—14グリッドに位置する。西側が調査区外

にかかり、平面形は不明である。径0.65m、深さ0.16mである。

土坑出土遺物（第26図）

第26図1・2は第11号土坑出土遺物である。1はかわらけ皿である。平底で体部は外方に開いて立ち上がる。底部糸切り離しによるロクロ調整である。2は在地産内耳鉢のLII縁部破片である。器壁はやや薄く口縁部がやや長い。

3は第26号土坑出土遺物である。1と同様のかわらけ皿である。平底で体部は外方に開いて立ち上がる。底部糸切り離しによるロクロ調整である。

4は第32号土坑出土遺物である。在地産のすり鉢で内面にはすり目が全体に施されている。

(3) 井戸

第1号井戸（第25図）

A区D—14グリッドに位置する。平面形は円形で、径1.15m、深さ1.36mである。断面は円筒形である。圓化しうる破片はなかったが、コの字状口縁をした土師器甕の破片、須恵器・土師器の小片が出土しており、平安時代の遺構と考えられる。

第2号井戸（第25図）

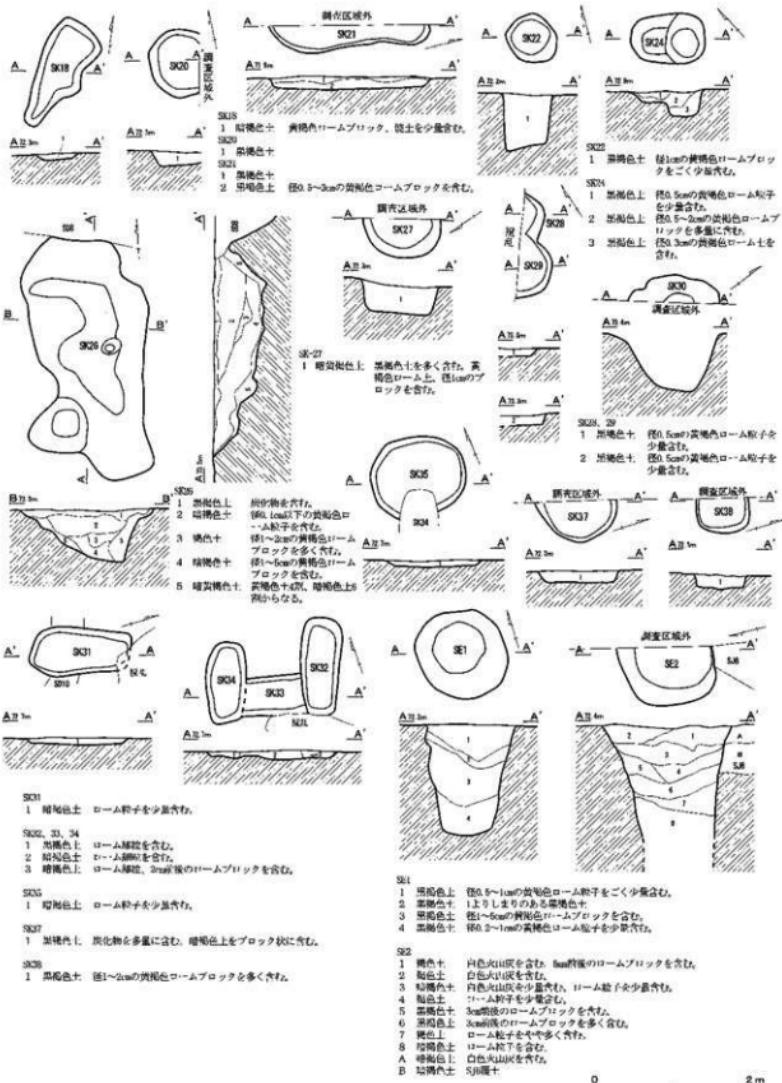
A区C—14グリッドに位置する。平面形は円形で、径1.6mである。やや開き気味に立ち上がる。奈良時代の第6号住居跡を壊していた。第6号住居跡の覆土の上部に堆積していた白色火山灰を含む暗褐色土を掘り込んで作られていた。底面を検出することはできなかった。時期を決定する遺物の出土はないが、耕作土直下の奈良時代以降の層を掘り込んでおり、中近世の遺構と考えられる。

(4) 溝

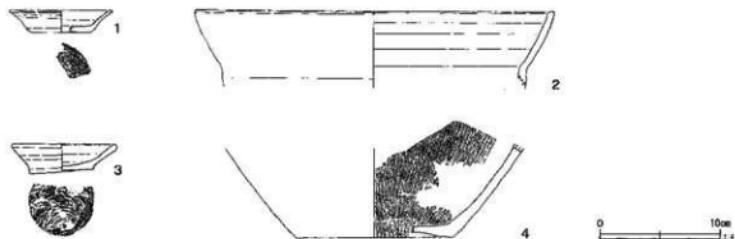
溝は10条が見つかっている。第1号溝から第11号溝まであり、4は欠番である。出土遺物は少なく、圓化しうるものはない。いずれも、中近世の遺構と考えられる。

第1号溝～第3号溝（第27図）

A区G—13グリッドからH—13グリッドにかけて見つかっている。ほぼ同一の東西方向に並んで延び



第25図 土坑(2)・井戸



第26図 土坑出土遺物

第9表 土坑出土遺物観察表

補岡番号	種別	器種	LH	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	かわらけ	皿	(8.4)	1.4	(4.9)	1/4	雲砂粒 白粒	良好	にぶい橙	SK11
2	在地	内耳端	(29.7)	[6.3]	—	破片	雲砂粒 白粒	普通	暗灰黄	SK11
3	かわらけ	皿	(8.1)	2.4	5.3	1/3	雲赤粒 白粒	普通	にぶい橙	SK26
4	常滑	すり鉢	—	[7.4]	(13.0)	破片	白粒	良好	赤褐	SK32内面すり目

ていた。3条ともに長さ約3.6mにわたって測定した。同一の暗褐色土の覆土であり、陶器の小片が出土地している。

第1号溝は最大で幅0.72m、深さ0.18m、第2号溝は幅0.84m、深さ0.1m、第3号溝は幅2.12m、深さ0.2mであった。

第5号溝（第27図）

A区C-14グリッドに位置する。幅0.9m、深さ0.4mであった。長さ2mを確認した。

第6号溝（第27図）

A区B-14グリッドに位置する。幅0.7m、深さはきわめて浅い溝で、5cmであった。長さ2mを確認した。

第7号溝（第27図）

A区A-14グリッドに位置する。幅0.9m、深さ0.2mであった。長さ2.2mを確認した。

第8号溝（第27図）

D区W-4・5グリッドに位置する。幅1.3m、深さ0.8mであった。整然とした溝で、底面は幅0.2

m前後であった。長さ5mを確認した。同化しうる

破片はなかったが、近世の磁器・瓦が出土している。

第9号溝（第27図）

D区W-4グリッドに位置する。D区の調査区間から見つかった溝である。ごく一部の調査であった。深さ0.4mであった。

第10号溝（第27図）

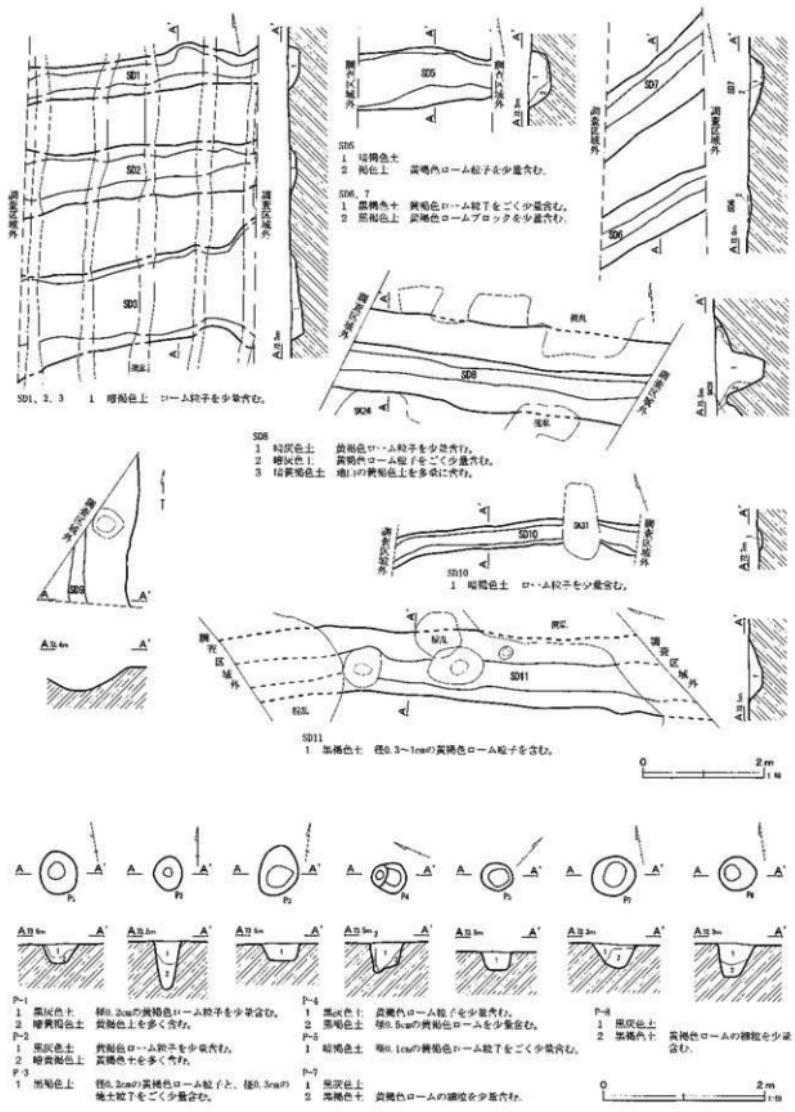
C区P-9グリッドに位置する。第31号土坑に壊されている。幅0.4m、深さ8cmであった。長さ4mを確認した。

第11号溝（第27図）

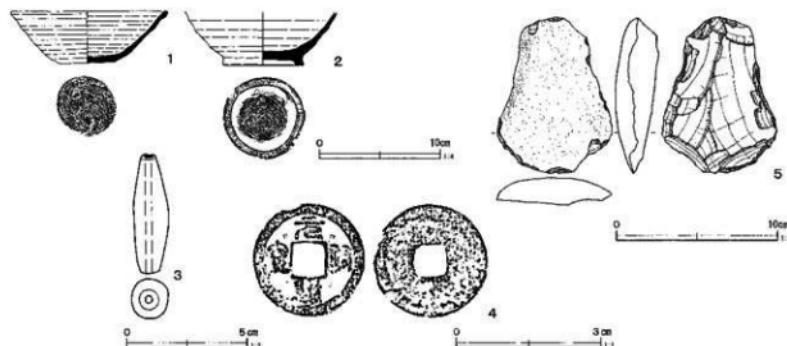
C区R-S-8グリッドに位置する。幅1.1m、深さ0.2mであった。北端は搅乱されていた。長さ5.4mを確認した。

（5）ピット

いずれもA区から見つかっている。7基が見つかっている。P1からP8まであり、P6は欠番である。出土遺物はなかったが、覆土の色調から古代以降、中世の遺構と考えられる。



第27図 溝・ピット



第28図 遺構外出土遺物

第10表 遺構外出土遺物観察表

押岡番号	種別	器種	口径	高さ	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	环	[12.7]	4.3	4.7	1/2	砂粒白粒	良好	灰黄	V-6グリッド
2	須恵器	高台付环	—	[4.4]	6.6	1/2	赤粒白粒 小砾	普通	にぶい黄	V-6グリッド

(6) その他の遺物

遺構外出土遺物（第28図）

第28図1・2はV-6グリッドからの出土である。V-6グリッド周辺には平安時代の第3～5号住居跡が検出されている。本来これらの住居跡に伴っていた遺物と考えられるが、後世の搅乱等によって遺構外から出土したものと推測される。

第28図1は須恵器環である。1は還元焰焼成され灰色に焼きしまっている。ロクロ整形で、器壁は薄く軽量である。口縁部は外方に開き口唇部肥厚する。2は須恵器高台付环である。底部糸切り後、「ハ」の字状に開いて、高台中央が凹む高台を貼り付ける。焼成は還元焰で灰色に焼きしまって硬い。

3は上鍤である。端部を少し欠くが、ほぼ完形である。大きさは長さ4.9cm、孔径0.3cm、最大径1.4cmである。形態は細長く中央が膨らむ。調整はナデ整形である。胎土は白色微粒子を含み酸化焰焼成されている。焼成は普通、色調は褐色である。A区の遺構外から出土している。

4は「元祐通宝（北宋 1086）」である。書体は篆書である。径2.4cm、孔径0.6cmである。D区の搅乱中から出土している。

5は打製石斧である。完形である。長さ9.6cm、最大幅7.1cm、厚さ2.4cm、重量197.4gである。正面には自然面を大きく残している。ホルンフェルス製。調査区に隣接した箇所から表採した。

V まとめ

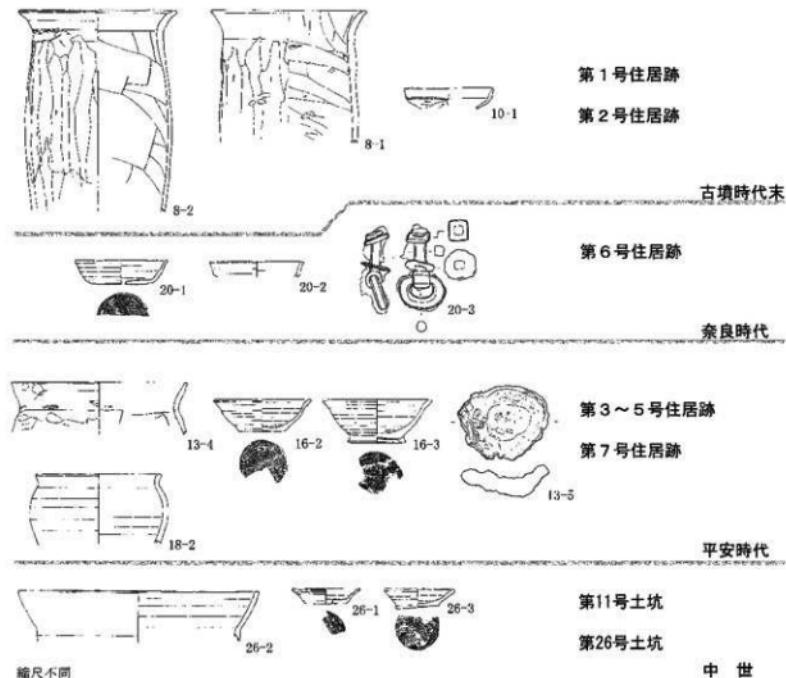
Ⅲ岡部町域では北部を中心に発掘調査が数多く実施されている。古墳時代から集落が営まれている岡沢地域では宮西遺跡に代表される遺跡が分布し、岡部地域では熊野遺跡をはじめとする遺跡が律令期になると大集落を形成し始める。

伊勢方遺跡の所在する本郷地域の調査はこれまで比較的少なく、近隣との時期的な関係はよくわかっていない。本郷地域はもちろん伊勢方遺跡の全体像を把握することにもほど遠いが、今回の調査所見の概略についてふれておきたい。

今回調査した7軒の住居跡は3つの時期のもので、最古のものは第1・2号住居跡の古墳時代末である。

最も古い時期は第1・2号住居跡の古墳時代末である。ともに調査区の北半に認められた。第1号住居跡では土師器壺（第8図1・2）、第2号住居跡からは土師器壺（第10図1）が出土している。

奈良時代の住居跡は第6号住居跡の1軒であり、須恵器壺（第20図1）、比企型の土師器壺（第20図2）が出土した。また、鉄製品として吊金具（第20図3）が出土したことは特筆される。



第29図 伊勢方遺跡出土遺物

平安時代には4軒の住居跡が確認されている。土師器壺・壺、須恵器壺が出土している。第3号住居跡から出土した楕形壺（第13図5）は小鍛冶の存在を示唆している。近隣に日を向けると、中山遺跡（第2図38 小林1999・赤熊2005）、台耕地遺跡（酒井1984）、菅原遺跡（大屋1996）など平安時代の製鉄場が検出された生産遺跡が分布しており、小鍛冶を集落内に有する遺跡に鉄塊が供給されたものと考えられる。

平安時代で特筆されるのは第7号住居跡からの埴輪の出土である。カマド袖部の補強に円筒埴輪が用いられていたものである。近隣に古墳は多く分布しており、この時期には古墳に何らかの働きかけがなされたものと考えられる。

中近世はまとまった遺物の出土はなかったが、溝・土坑・柱穴などの遺構が見つかっている。第11号、第26号土坑からはこの時期の遺物が出土している。

参考文献

- 栗原文藏 小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』47-2
- 増田逸朗 1975 『千光寺』埼玉県遺跡調査会報告第27集
- 佐藤忠雄 斎藤国夫 1978 『後棟沢遺跡群の調査』岡部町教育委員会
- 小林達雄 安岡路洋 1979 「縄文時代草創期における回転施文繩文への一様相—埼玉県大里郡岡部町水久保遺跡』『埼玉県史研究』4
- 中島宏他 1980 『伊勢塚・東光寺裏』埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集
- 佐藤忠雄 1983 『西龍ヶ谷遺跡』『第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
- 酒井清治 1984 『台耕地（II）』埼玉県遺跡発掘調査報告書第33集
- 埼玉県 1986 『新編埼玉県史 別編3 自然』
- 埼玉県教育委員会 1988 『埼玉の中世城館跡』
- 中村倉司 1989 『白山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第17集
- 埼玉県 1993 『中川水系 I 総論・II 自然 中川水系総合調査報告書 I』
- 大屋道則 1996 『菅原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第169集
- 鳥羽政之 1997 『熊野遺跡発掘調査概要報告書』岡部町遺跡調査会概要報告書
- 木戸春夫 1998 『沖田I／沖田II／沖田III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第231集
- 小林高 1999 『中山遺跡（第1次・第2次）』寄居町遺跡調査会報告第20集
- 赤熊浩一 2000 『熊野／新田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第251集
- 富田和夫 2002 『熊野遺跡（A・C・D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
- 木戸春夫 桜井元子 2003 『宮西遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第288集
- 岡部町 2004 『岡部町合併50周年記念誌 誰り継ぐ、岡部』
- 塙野博 2004 『埼玉の古墳 児玉』さきたま出版会
- 塙野博 2004 『埼玉の古墳 大里』さきたま出版会
- 木戸春夫 2005 『宮西遺跡 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第310集
- 赤熊浩一 2006 『中山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第313集

写 真 図 版



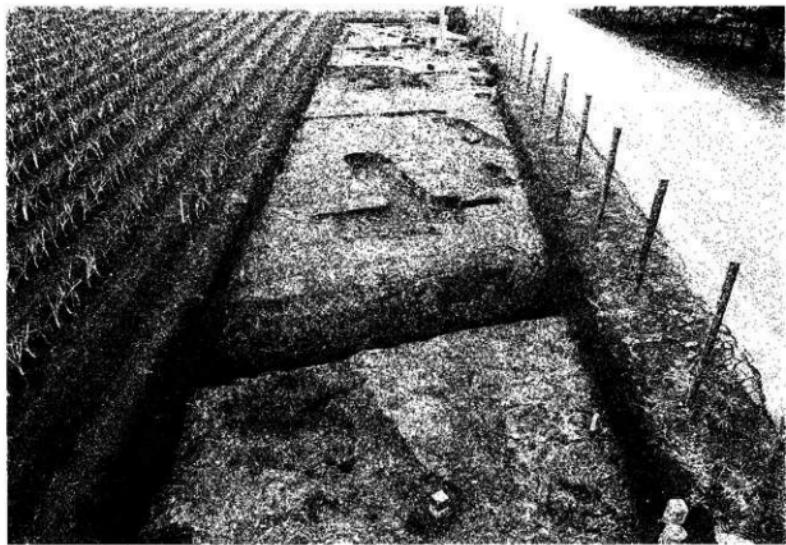
A区全景（北から）



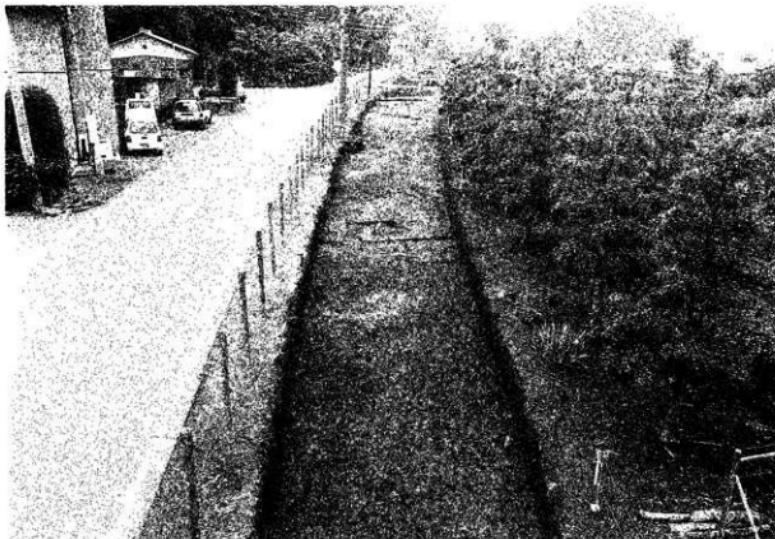
B区全景（北から）



D区全景（北から）



D区全景（南から）



C区全景（北から）



E区全景（北から）



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



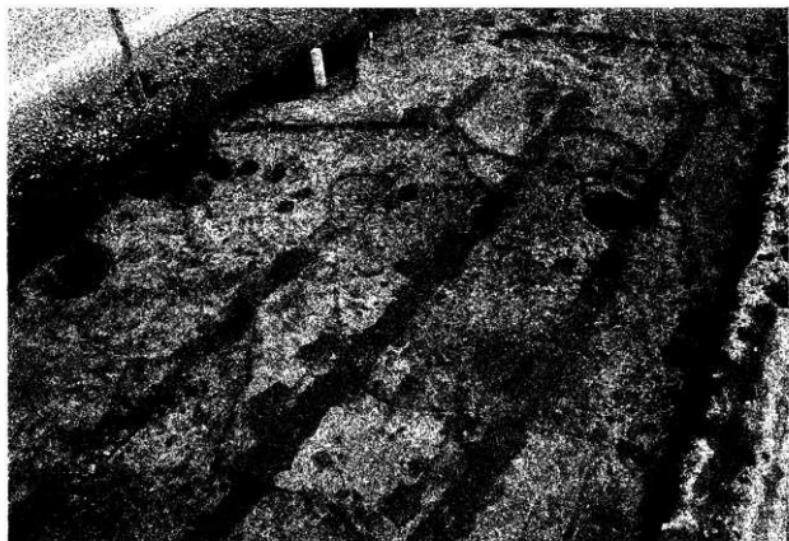
第2号住居跡（西から）



第2号住居跡（南西から）



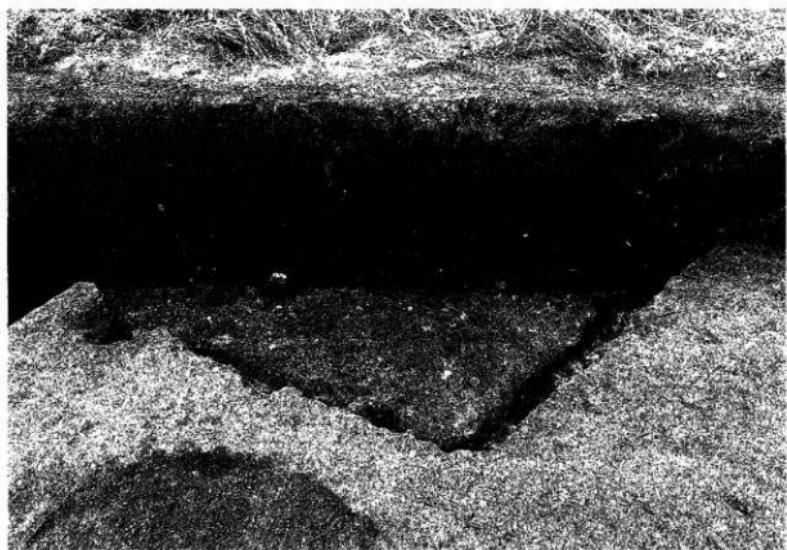
第4·5号住居跡遺物出土状況



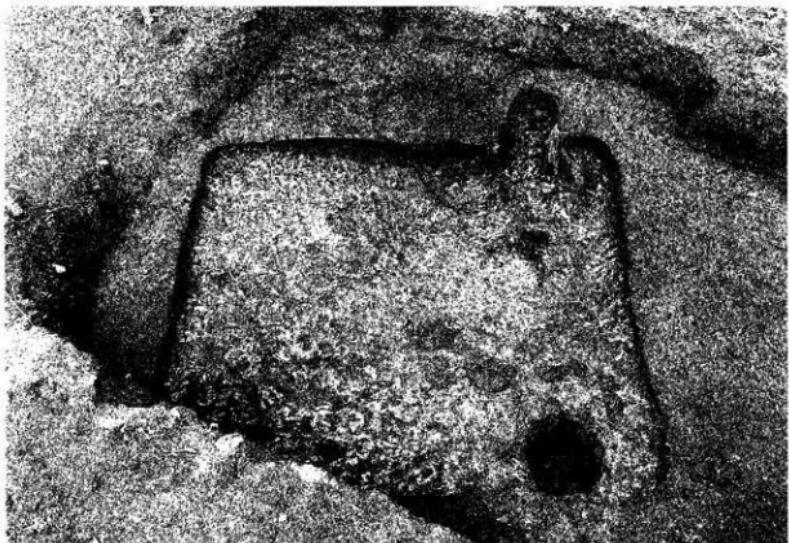
第4·5号住居跡



第3号住居跡



第6号住居跡



第7号住居跡



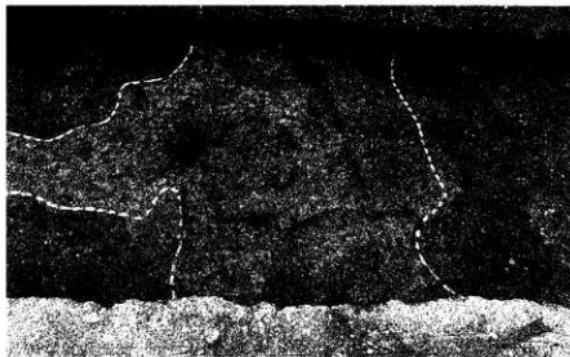
第7号住居跡カマド遺物出土状況



第7号住居跡カマド



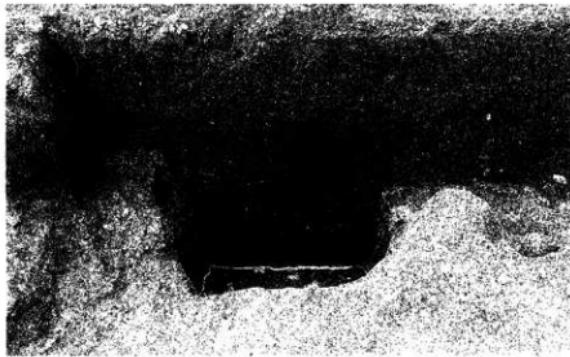
第8号溝



第10号溝・第31～35号土坑



第11号土坑



第2号井戸



第1号住居跡出土 土師器壺（第8図2）



第1号住居跡出土 土師器壺（第8図1）



第2号住居跡出土 土師器壺（第10図1）



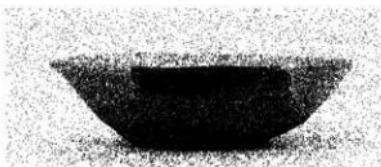
第1号住居跡出土 土師器壺（第8図3）



第3号住居跡 土師器壺（第13図4）



第4号住居跡出土 須恵器壺（第16図2）



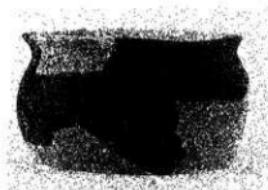
第4号住居跡出土 須恵器壺（第16図1）



第4号住居跡出土 須恵器高台付壺（第16図3）



第5号住居跡出土 須恵器高台付壺（第18図1）



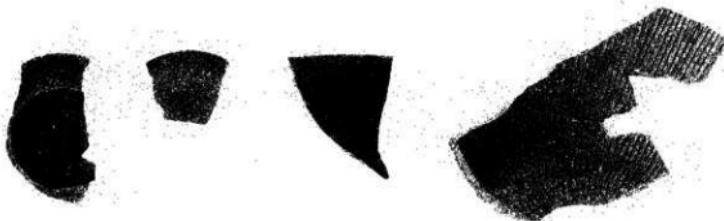
第5号住居跡出土 土器鋏型（第18図2）



第3号住居跡出土 梭形鋏（第13図5）



第6号住居跡出土 吊金具（第20図3）



土坑出土遺物（第26図）



造構外出土 須恵器片（第28図1）



造構外出土 須恵器高台付片（第28図2）



第28図3

造構外出土遺物



第28図4

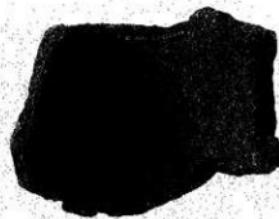


第28図5





第7号住居跡出土 円筒埴輪（第23図4）



第7号住居跡出土 円筒埴輪（第23図2）



第7号住居跡出土 円筒埴輪（第23図3）

報告書抄録

ふりがな	いせがたいせき							
書名	伊勢方遺跡							
副書名	県道花園本庄線関係埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第326集							
編著者名	新尾雅明							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台44-1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦 2006(平成18)年3月24日							
所 取 遺 跡	所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いせがたいせき 伊勢方遺跡	ふかやこうんごうまわいせき 深谷市本郷の伊勢方	11405	036	36°10'46"	139°13'06"	20050601～ 20050731	1,187	道路建設
1398番地-2他								
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
伊勢方遺跡	集落跡	古墳時代	住居跡	2軒	土師器・埴輪			
		奈良時代	住居跡	1軒	須恵器・土師器・呂金具			
		平安時代	住居跡	4軒	須恵器・土師器・楕形罐			
			井戸	1基				
	中世	土坑	33基	かわらけ・内耳鉢・ すり鉢				
		井戸	1基					
		溝	10条					
		ピット	7基					

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第326集

深谷市

伊勢方遺跡

県道花園本庄線関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成18年3月17日 印刷

平成18年3月24日 発行

発行／埼玉県

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4-4-1

電話 0493(39)3955

印刷／巧和工芸印刷株式会社